

第1章 大田区の歴史的風致形成の背景

1-1. 自然的環境

(1)位置

要確認 (面積: 2025.12 データ確認)

面積は、東京都23区のなかで最大の61.86平方キロメートルを有し、東西15.7キロメートル、南北9.4キロメートルの大きさである。なお、区の約4分1の面積を羽田空港が占める。



図1-1-1 東京都内での大田区の位置

東は東京湾、西と南は多摩川に面し、江東区、品川区、目黒区、世田谷区及び神奈川県川崎市とそれぞれ隣接している。東京から約15キロメートル、品川から約8キロメートル、横浜から約13キロメートルの距離である。

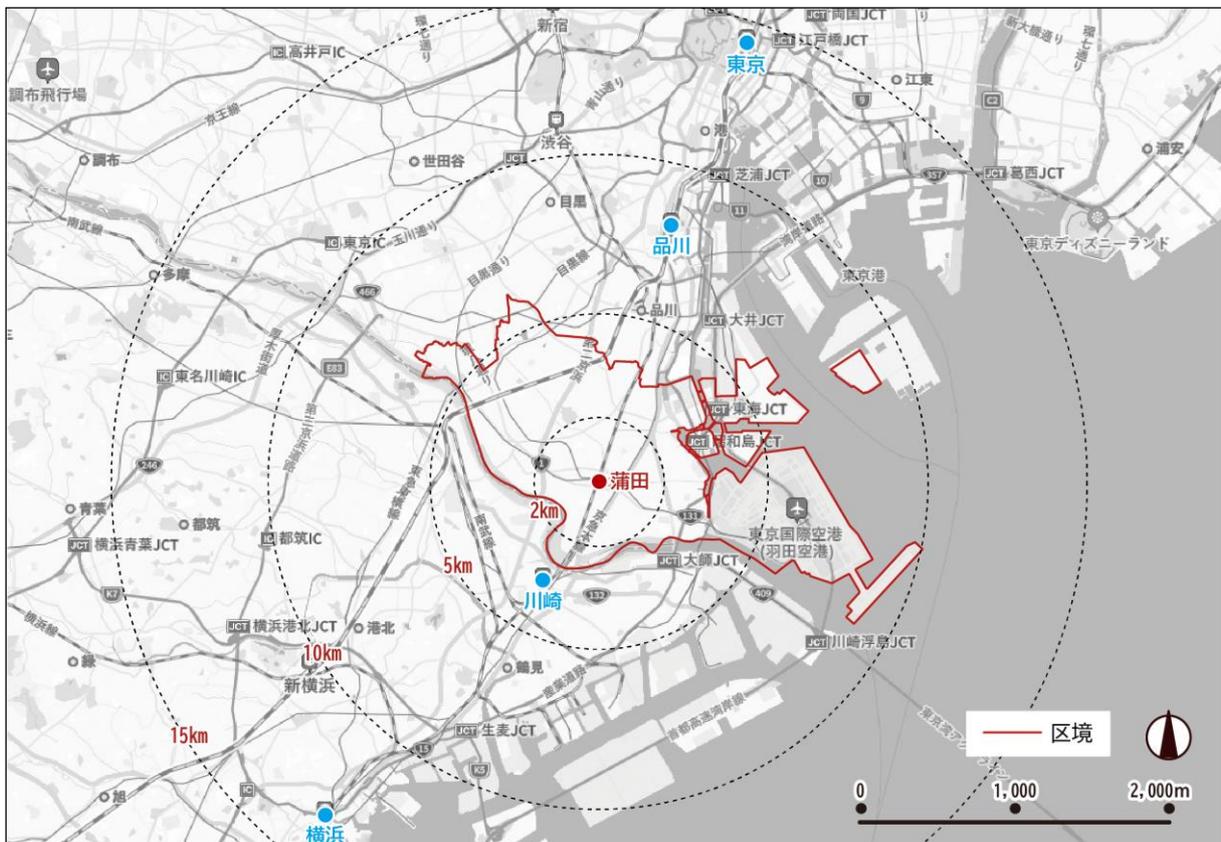


図1-1-2 大田区の区域

(2)地形

区域は、北西部の丘陵地帯と南東部の低地に二分され、丘陵地は武蔵野台地の南東端に当たる。また、低地部は、海岸や多摩川の自然隆起と堆積によりできた沖積地とそれに続く埋立地からなっている。

海拔は、田園調布付近が区内最高地点で 42.5 メートルあり、南東に向かって次第に低くなり、低地部の高い所で5メートル程度、また海岸線や埋立地で1メートル程度である。

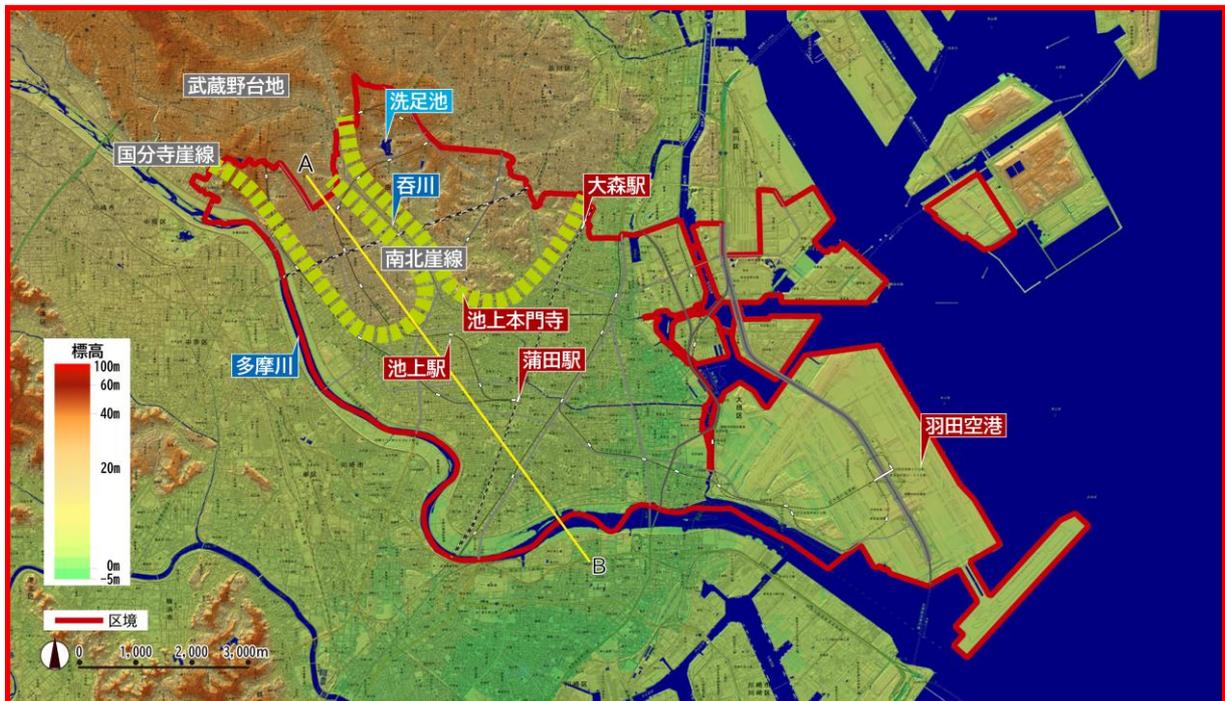


図 1-1-3 大田区の地形（「A-B」は、下図断面図の位置）

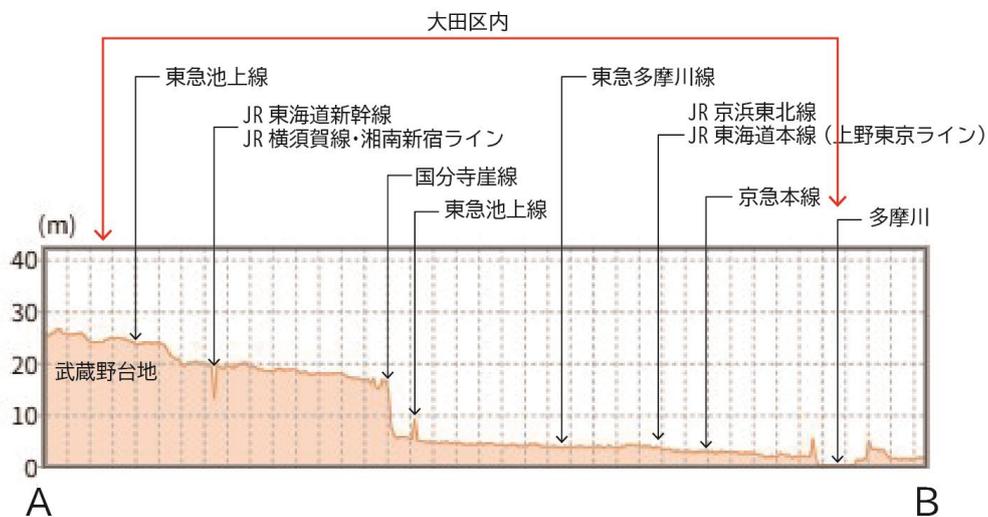


図 1-1-4 A. 大田区北西部(武蔵野台地)～B. 大田区南部(六郷・多摩川)の断面

(3)地質

大田区の地質は、大きく分けて2つの地層で構成される。

1つは、武蔵野台地を形成する段丘堆積物で構成された地層である。**大田区にある武蔵野台地**は、段丘堆積物を基盤とし、その表層部分を赤褐色の火山灰起源の関東ローム層(平均約20メートル)が覆っている。

もう1つは、海岸平野堆積物等で構成された地層である。低地部分は、砂や泥等の海岸平野堆積物(沖積層)で構成されており、三角州や海岸低地を形成している。

その他は、羽田空港や平和島、昭和島、城南島、京浜島等の埋立地である。

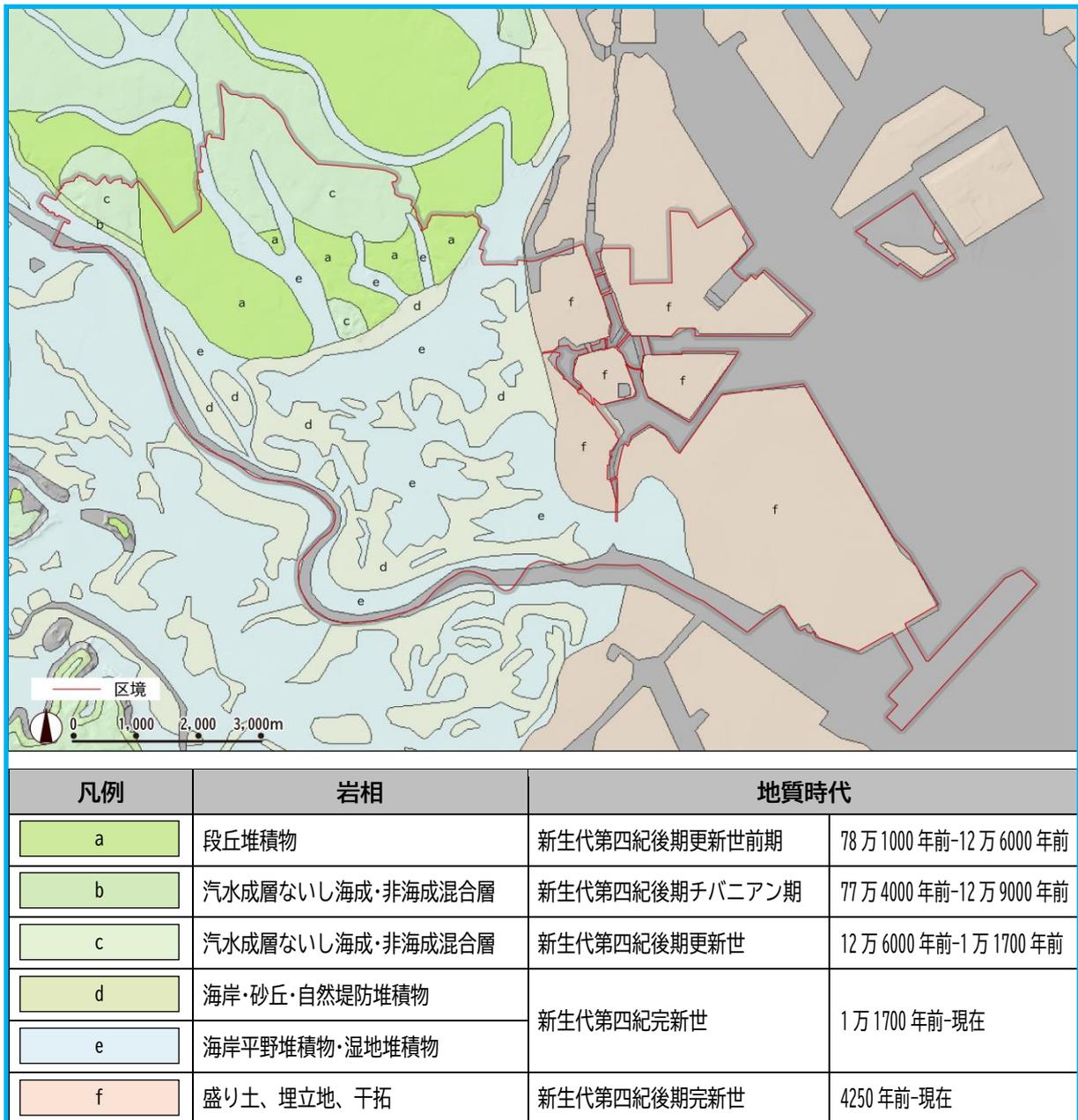


図 1-1-5 大田区の地質

(4)水系

①河川

区内を流れる河川には、多摩川、海老取川、丸子川、呑川、内川がある。

多摩川は、山梨県、東京都、神奈川県を流れる多摩川水系の本流の1級河川である。下流域は東京都と神奈川県の都県境としての役割を担い、首都圏の1級河川でありながら、護岸整備されていない部分も多く、川辺に野草や野鳥を多く見ることができ自然豊かな河川である。



図 1-1-6 多摩川河川敷

海老取川は、羽田6丁目辺りで多摩川から分流し、羽田空港を隔てるように北流する多摩川水系の1級河川である。流れがほとんどないため、岸には羽田漁師の船やプレジャーボートが係留される風景を見ることができる。

丸子川は、上流端を東京都世田谷区内の仙川との合流点とし、下流端を田園調布1丁目とする多摩川に並行して流れる1級河川である。

呑川は、呑川水系の本流の2級河川である。東京都世田谷区内に水源を持ち、本区内は石川町、雪谷、久が原、池上、蒲田、大森及び糎谷を流れて東京湾に注いでいる。下流部は、潮の満ち引きの影響を受ける感潮河川となっている。なお、東蒲田付近で旧呑川と新呑川に分流するが、大水の際の洪水や氾濫を防ぐために直線化した新呑川が本流であり、羽田空港との間の海老取川に注ぎ込んでいる。

内川は、左岸の上流端を大森西1丁目、下流端を大森東1丁目、右岸の上流端を大森西4丁目、下流端を大森東2丁目を流れ、大森ふるさとの浜辺公園付近で京浜運河に注ぎ込んでいる2級河川である。

②池

区内の代表的な池には、洗足池があげられる。

洗足池は、洗足池公園内にある、流れ込む河川のない池である。昔、主要な水源となる湧水は4箇所あったとされるが、現在は清水窪弁財天の湧水が1つ残るのみとなっている。なお、清水窪弁財天の湧水は、区の天然記念物に指定され、また「東京の名湧水57選(平成15年(2003)



図 1-1-7 洗足池

1月)」に選定されている。洗足池公園は、春になると、昭和初期に植樹された約200本の桜が見頃を迎え、池と桜が映える花見の名所として、毎年、大勢の観光客が集まり、賑わいを見せる場所となっている。

なお、かつて「千束郷の大池」と呼ばれていた洗足池の名の由来には、地名の「千束」によるもののほか様々な説があるが、その1つに身延山久遠寺から常陸へ湯治に向かう途中の日蓮宗開祖・日蓮が休息した際、池畔で手足を洗ったという説もある。その際に日蓮が袈裟を掛けたとされる「袈裟懸(掛)の松」の**伝承**が、隣接する妙福寺に今も残っている。

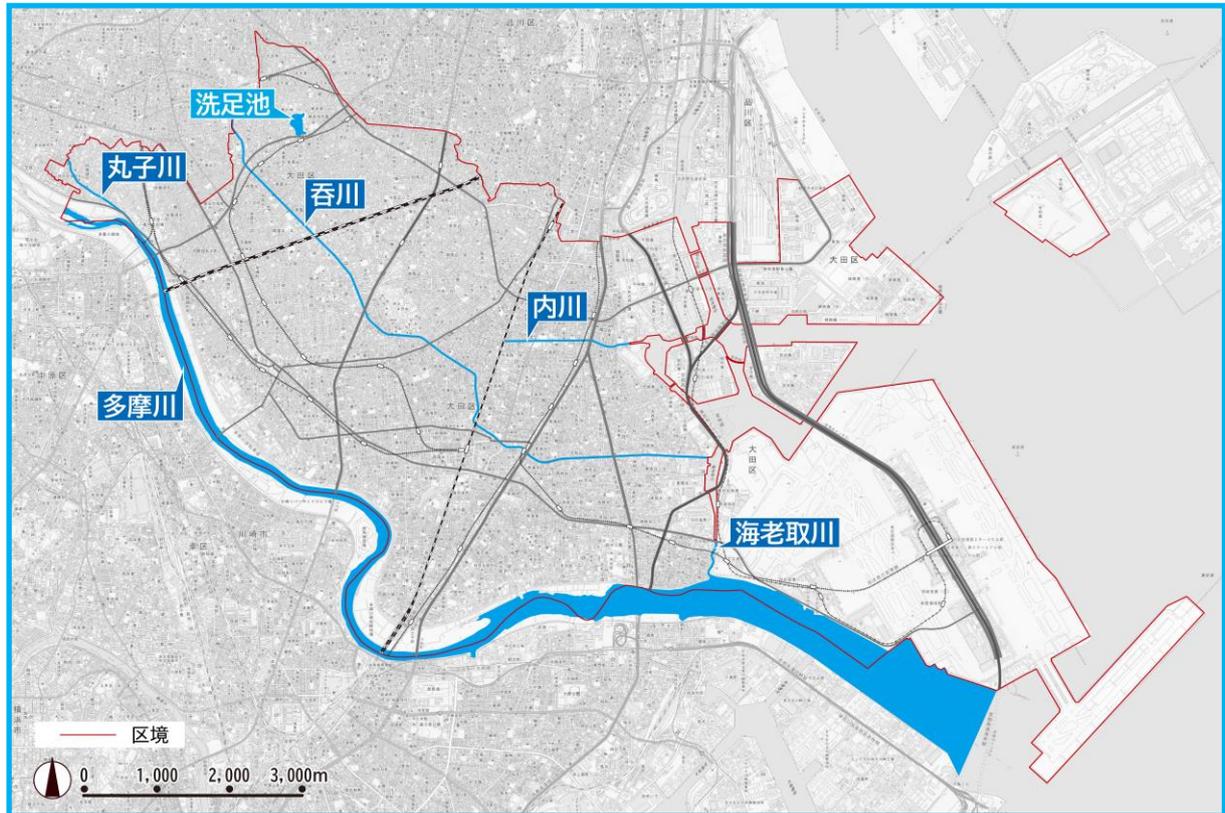


図 1-1-8 大田区内の主な河川と池

(5)みどり

大田区のみどりは、国分寺崖線沿いや南北崖線沿い、また多摩川、呑川、内川等の河川、さらには運河沿いのみどり等がつながり、都市の骨格の一部を形成している。

平成30年度(2018)時点の区全体の緑被率は18.32%、羽田空港を除くと15.75%である。緑被率は過去35年間ほぼ横ばいであったが、平成30年(2018)で減少に転じた。これは樹木緑被率の減少が大きく、住宅地を中心とした私有地における開発や宅地の細分化が要因となっている。

一方、公園等の整備状況は、令和4年(2022)4月時点で574箇所、総面積約306ヘクタールであり、区民1人当たりの面積は4.19平方メートルである。また、河川敷の緑地等を含めると総面積は約383ヘクタールとなり、区民1人当たりの面積は5.25平方メートルとなる。

また、農地は、面積約2.5ヘクタール、うち約2ヘクタールが生産緑地の指定を受けているものの、市街化の進展により減少傾向にある。

さらに、一定規模以上の木竹の伐採等の行為を許可制とし、緑地を保全する制度として都市緑地法第12条に規定されている特別緑地保全地区は、令和2年(2020)時点で4箇所、面積2.64ヘクタールが指定されている。



図 1-1-9 緑被概況と特別緑地保全地区

(6) 気象

大田区の過去5年間(令和2年(2020)～令和6年(2024))の月別平均気温と月別平均降水量は、以下のとおりである。

月別平均気温をみると、最高が8月の28.7℃、最低が1月の7.0℃である。年間平均気温は17.5℃である。一方、月別平均降水量は6月が最も多く、198.5ミリである。

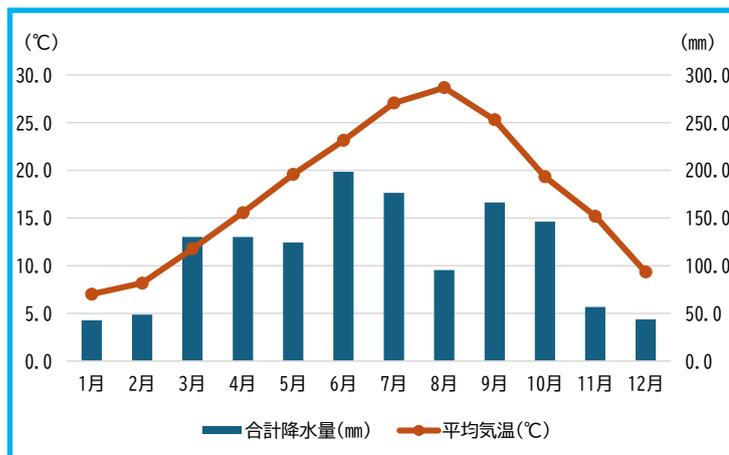


図 1-1-10 月別の合計降水量と平均気温(過去5年間平均)

表 1-1-1 年別・月別の平均気温(大田区羽田) (℃)

	2020年	2021年	2022年	2023年	2024年	5年間の平均
1月	8.2	6.4	5.8	6.7	8.0	7.0
2月	9.1	9.1	6.0	8.0	8.7	8.2
3月	11.4	13.0	11.1	13.2	10.2	11.8
4月	13.4	15.4	15.4	16.7	16.9	15.6
5月	19.6	19.8	19.1	19.3	20.1	19.6
6月	23.3	22.9	22.8	23.4	23.3	23.1
7月	24.7	26.1	27.4	28.4	28.7	27.1
8月	29.1	27.7	27.7	29.4	29.4	28.7
9月	24.9	22.8	24.6	27.2	27.0	25.3
10月	18.2	18.9	18.3	19.8	21.4	19.3
11月	15.0	14.8	15.6	15.6	14.9	15.2
12月	9.0	9.0	8.8	10.5	9.4	9.3

表 1-1-2 年別・月別の平均降水量(大田区羽田) (mm)

	2020年	2021年	2022年	2023年	2024年	5年間の平均
1月	95.5	44.5	17.0	17.5	39.5	42.8
2月	19.0	70.0	56.0	34.5	64.0	48.7
3月	107.5	170.0	98.5	102.5	172.5	130.2
4月	174.0	127.5	187.5	64.0	97.5	130.1
5月	88.5	91.5	113.5	161.5	167.5	124.5
6月	180.5	75.0	60.5	275.0	401.5	198.5
7月	252.5	252.0	207.0	39.5	131.5	176.5
8月	6.0	213.5	124.0	104.5	29.5	95.5
9月	113.0	172.5	247.5	206.5	92.0	166.3
10月	154.5	190.5	105.5	125.0	156.0	146.3
11月	13.0	69.0	73.0	44.0	84.5	56.7
12月	11.0	129.5	52.0	26.0	0.0	43.7

1-2. 社会的環境

(1) 区の合併経緯

明治4年(1871)、大区小区制が始まり、東京府は6大区 97 小区に分けられた。明治6年(1873)には、近隣地域の編入により 11 大区 103 小区となり、**このとき**、第7大区が現在の大田区のおおよその位置に該当し、43 の村があった。

明治11年(1878)、郡区町村編成法(郡区町村制)が制定されて大区小区制は廃止となり、代わって東京府には 15 区 6 郡が配置された。**このとき**、荏原郡が現在の大田区のおおよそ位置に該当する。村の数は変わらない。

明治22年(1889)、15 区の区域が新たに東京市となり、明治26年(1893)に三多摩地域(西多摩郡、南多摩郡、北多摩郡)が東京府に移管されて、概ね現在の東京都域が確定した。その後の明治29年(1896)には東多摩郡と南豊島郡が合併して豊多摩郡となる。明治22年(1889)の市町村制により、大森村、入新井村、馬込村、池上村、調布村、矢口村、蒲田村、六郷村、羽田村の**9**村が現在の大田区のおおよその位置に該当する。

昭和7年(1932)、東京市が周辺5郡 82 町村を新たに 20 区に編成、合併して東京 35 区ができる。**このとき**、馬込、東調布、池上、入新井、大森の5つの町が大森区として、また、矢口、蒲田、六郷、羽田の4つの町が蒲田区としてできている。

その後、昭和22年(1947)3月15日、35 区が 22 区に再編された際(同年(1947)8月に練馬区が板橋区から分離独立して 23 区になる)、当時の大森区と蒲田区が合併して現在の大田区が成立した。

また、近年では、令和2年(2020)に中央防波堤外側埋立地西側が令和島として加わった。

表 1-2-1 大田区の合併経緯

	大区制 明治4年～11年	郡区町村制 明治11年～22年	市町村制 明治22年～昭和7年	町改正 町制施行	市域拡張 昭和7年～22年	現在区名 昭和22年～
第七大区	三小区 大森村	大森村	大森村	大森町	大森区	大田区
	三小区 不入斗村	不入斗村	入新井村	入新井町		
	三小区 新井宿村	新井宿村		馬込村		
	五小区 馬込村	馬込村	池上村			
	五小区 石川村	石川村				
	五小区 雪ヶ谷村	雪ヶ谷村				
	五小区 池上村	池上村				
	三小区 市野倉村	市野倉村				
	五小区 桐ヶ谷村	桐ヶ谷村				
	三小区 堤方村	堤方村				
	三小区 下池上村	下池上村				
	四小区 徳持村	徳持村				
	三小区 久ヶ原村	久ヶ原村				
	五小区 道々橋村	道々橋村				
	四小区 鶺ノ木村	鶺ノ木村	調布村	東調布町		
	五小区 嶺村	嶺村				
	五小区 下沼部村	下沼部村				
	五小区 上沼部村	上沼部村				
	四小区 蓮沼村	蓮沼村	矢口村	矢口町		
	四小区 道塚村	道塚村				
四小区 小林村	小林村					
四小区 安方村	安方村					
四小区 原村	原村					
四小区 今泉村	今泉村					
四小区 古市場村	古市場村					
四小区 矢口村	矢口村					
四小区 下丸子村	下丸子村					
三小区 女塚村	女塚村	蒲田村	蒲田町			
三小区 御園村	御園村					
三小区 北蒲田村	北蒲田村					
四小区 蒲田新宿村	蒲田新宿村					
四小区 雑色村	雑色村	六郷村	六郷町			
四小区 八幡塚村	八幡塚村					
四小区 町屋村	町屋村					
四小区 高畑村	高畑村					
四小区 古川村	古川村					
四小区 糶谷村	糶谷村	羽田村	羽田町			
四小区 浜竹村	浜竹村					
三小区 下袋村	下袋村					
四小区 萩中村	萩中村					
四小区 鈴木新田	鈴木新田					
四小区 羽田獵師町	羽田獵師町					
四小区 羽田村	羽田村					

大田区史(昭和26年発行)より作成

(2)土地利用

区全域が都市計画区域に指定されている。

東京都都市整備局の資料(令和3年(2021)時点)によると、宅地は50.6%、道路等は32.6%、水面・河川等は5.7%を占めている。

なお、区部の面積、地目別土地利用面積とその割合は、令和3年(2021)作成のDM地形図に基づいて、「都市計画地理情報システム」を用いて計量・解析を行って求めたものであるため、これらの数値は、一般的に使用されている行政面積等とは必ずしも一致しない。

表 1-2-2 地目別土地利用面積と割合 (令和3年(2021))

	合計	宅地	その他	公園等	未利用地	道路等	農用地	水面・河川等	森林	原野
面積(ha)	6,315.6	3,196.6	215.0	293.3	128.8	2,056.2	3.2	358.4	1.7	62.6
割合(%)	100.0	50.6	3.4	4.6	2.0	32.6	0.1	5.7	0.0	1.0

※合計は、各項目の四捨五入の関係で合わない。

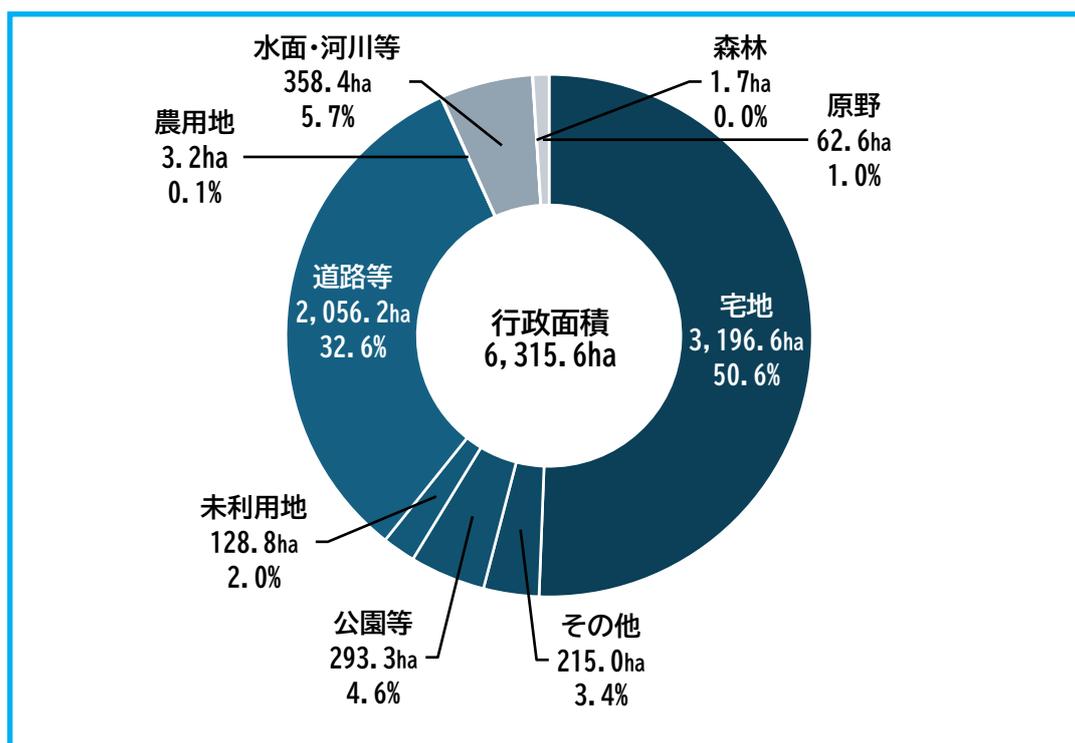


図 1-2-1 地目別土地利用面積と割合 (令和3年(2021))

(3)人口動態

①人口の推移と将来推計人口

大田区の人口は、令和7年(2025)1月1日時点で740,519人(住民基本台帳)であり、都内区市町村のなかでは、世田谷区、練馬区に次いで3番目に多い。

近年、人口は増加傾向を示しており、10年前の平成27年(2015)(1月1日時点)と比べると約33,000人増加している。なお、令和3年(2021)～令和5年(2023)は、新型コロナウイルス感染症拡大が影響したためか転出超過になったが、令和6年(2024)には再び増加に転じている。

令和6年(2024)を基準年として推計された将来人口をみると、緩やかに増加した人口は、2042年に約735,800人のピークに達し、その後、急激に減少して、2070年に約710,572人になることが見込まれている。

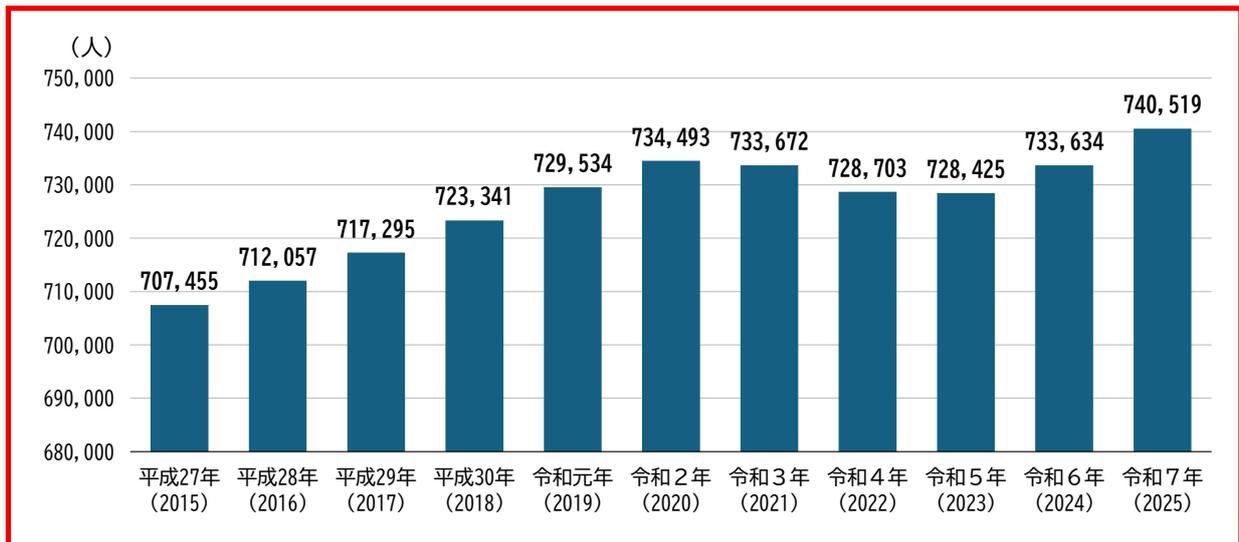


図1-2-2 総人口の推移(住民基本台帳、各年1月1日時点)

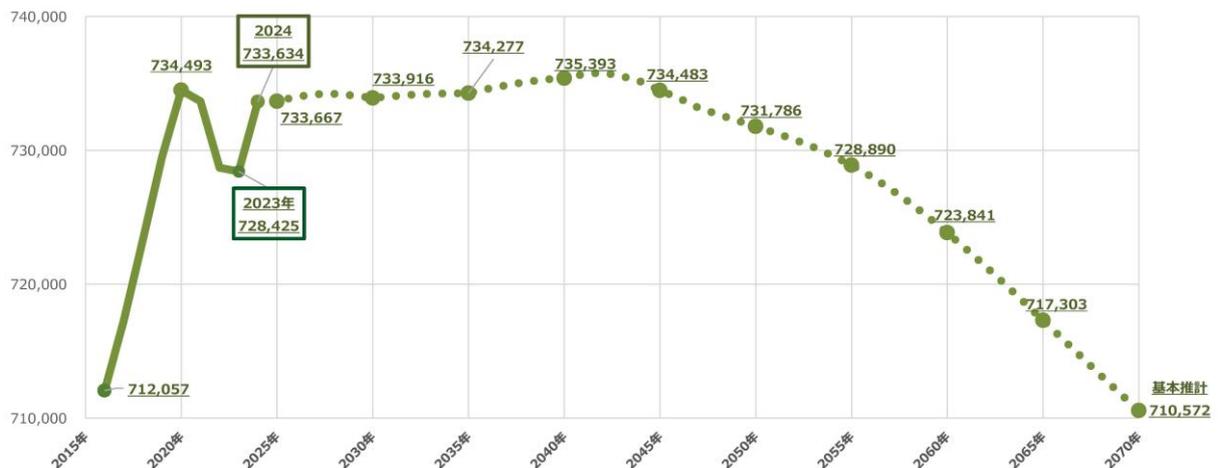


図1-2-3 将来人口の推計

②年齢別人口の推移と年齢別将来推計人口

令和7年(2025)1月1日時点の年齢3区分別人口をみると、0～14歳は74,263人(10.0%)、15～64歳は502,189人(67.8%)、65歳以上は164,067人(22.2%)となっている。

一方、令和6年(2025)1月1日時点の東京都全体では、0～14歳は1,540,731人(11.1%)、15～64歳は9,227,915人(66.3%)、65歳以上は3,143,256人(22.6%)となっている。

この結果から、大田区では、東京都全体と比較すると年少人口と老年人口がわずかに少なく、生産年齢人口がわずかに多いことが分かる。

令和6年(2024)を基準年として推計された将来人口をみると、0～14歳(年少人口)と15歳～64歳(生産年齢人口)は、いずれも一時微増するものの、2070年に人口は基準年に比べると減少し、総人口に占める割合も減少している。一方、65歳以上(老年人口)は、微増減を繰り返し、2070年の人口は基準年に比べると増加し、総人口に占める割合も増加している。

表 1-2-3 年齢3区分別人口と割合(大田区と東京都全体)

	大田区(令和7年(2025)1月1日時点)			東京都全体(令和6年(2024)1月1日時点)		
	年少人口 (0～14歳)	生産年齢人口 (15～64歳)	老年人口 (65歳～)	年少人口 (0～14歳)	生産年齢人口 (15～64歳)	老年人口 (65歳～)
実数(人)	74,263	502,189	164,067	1,540,731	9,227,915	3,143,256
割合(%)	10.0	67.8	22.2	11.1	66.3	22.6

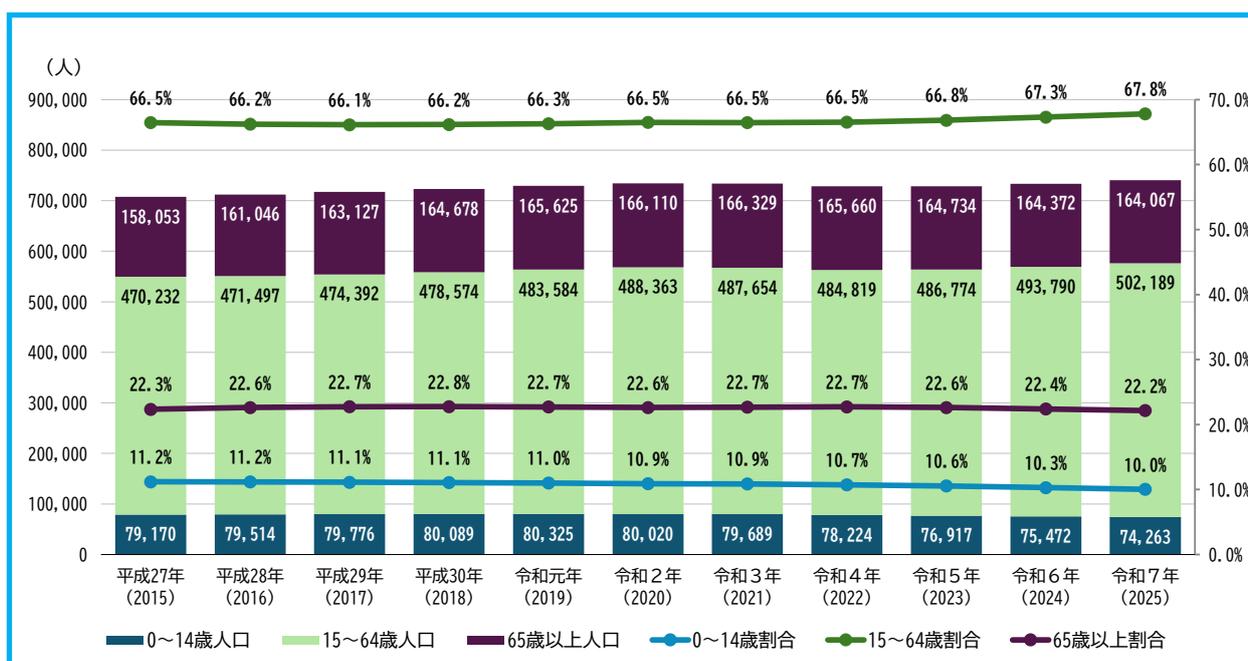


図 1-2-4 年齢構成別人口と割合の推移

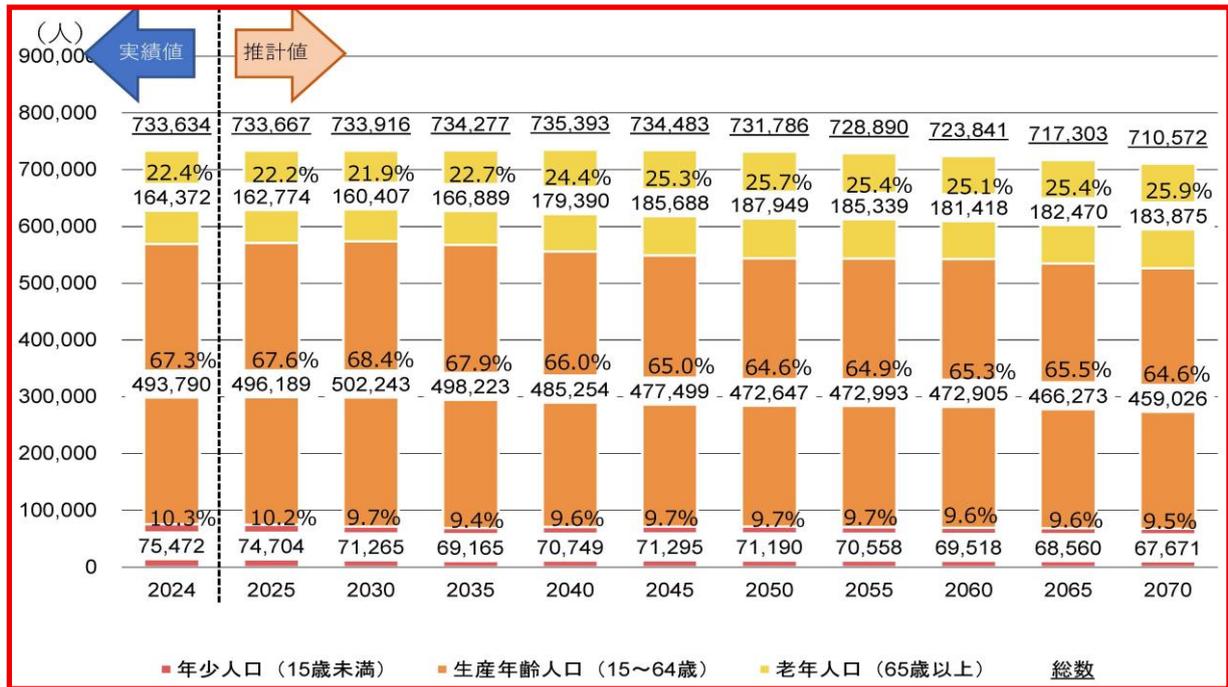


図 1-2-5 将来年齢構成別人口の推移

(4)交通機関

鉄道は、JR東海道新幹線とJR横須賀線・湘南新宿ラインが区北西部を東西方向に通り、JR東海道本線(上野東京ライン)とJR京浜東北線が区中央部を南北方向に通っている。なお、区内にはJR京浜東北線、京急本線、京急空港線、東京モノレール、東急東横線、東急目黒線、東急多摩川線、東急大井町線、東急池上線、都営浅草線の10路線が区内を縦横に通り、各路線における駅の合計は43駅にのぼる。乗降客数等から区の中心的な駅として、蒲田駅(JR京浜東北線、東急池上線、東急多摩川線)、京急蒲田駅(京急本線、京急空港線)、大森駅(JR京浜東北線)があげられる。蒲田駅と京急蒲田駅は約800メートル離れていることから、区内外の移動の利便性や沿線まちづくりに寄与することを目的に、令和7年(2025)現在、蒲田駅(東急電鉄)と京急蒲田駅(京浜急行電鉄)付近を結ぶ鉄道路線計画「新空港線(蒲蒲線)」が検討されている。

道路は、東京都中央区を起点とし大阪市を終点とする国道1号が区西部寄りを南北に縦断するとともに、同じく中央区を起点とし横浜市を終点とする国道15号が区中央を南北に縦断している。また、東京湾を取り巻く千葉県、東京都、神奈川県を海岸沿いを通る国道357号(東京湾岸道路)が区東部及び羽田空港敷地内を縦断している。

広域交通網では、羽田インターチェンジを始めとする3つのインターチェンジを有する首都高速1号や首都高速湾岸線が、区東部を南北に縦断している。

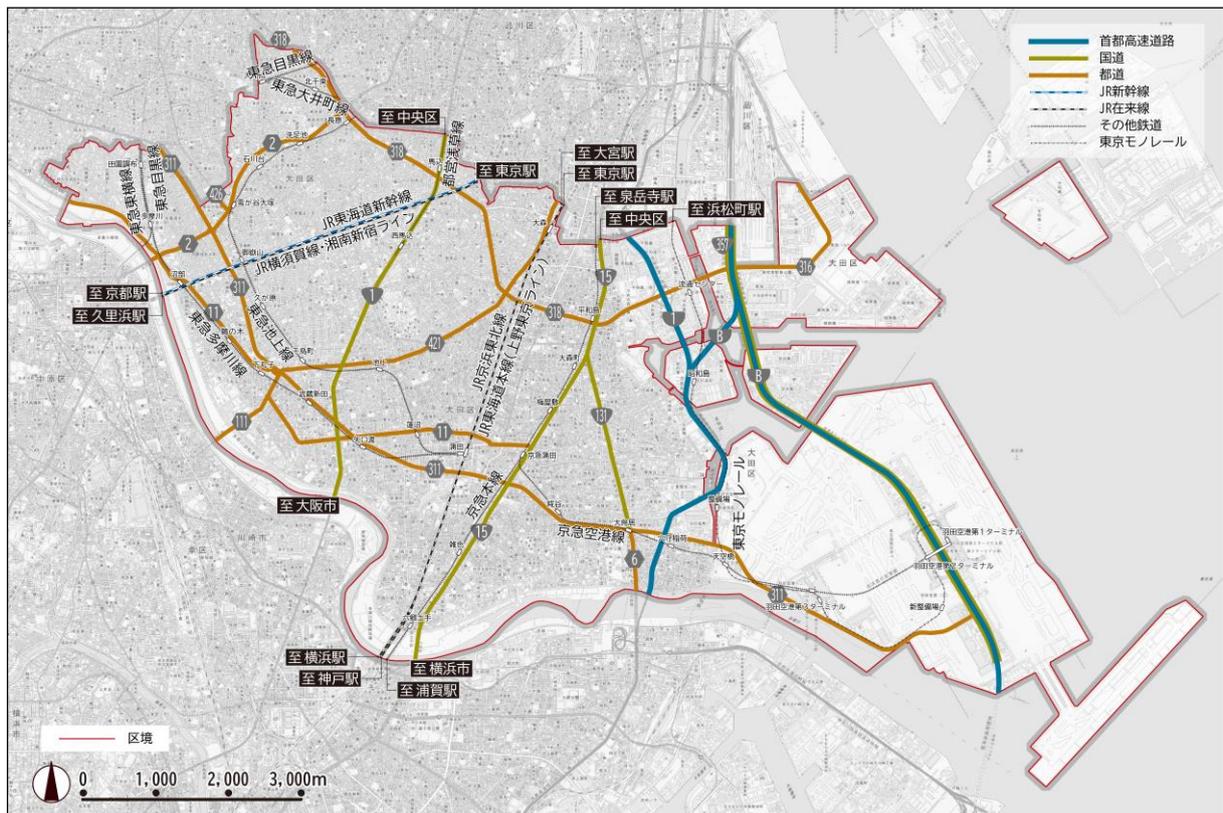


図 1-2-6 交通網

(5)産業

令和2年(2020)の国勢調査によれば、15歳以上の就業者総数 347,458 人のうち、第1次産業就業者は 454 人(0.1%)[特別区部 0.2%]、第2次産業就業者は 58,661 人(16.9%)[特別区部 13.8%]、第3次産業就業者は 272,733 人(78.5%)[特別区部 81.9%]、不明(分類不能)は 15,610 人(4.5%)[特別区部 4.2%]である。

経年では、第1次産業の就業者数割合はほぼ横ばいで推移し、第2次産業は減少傾向を示している。第3次産業は一時減少するものの、平成22年(2012)以降は増加傾向を示している。

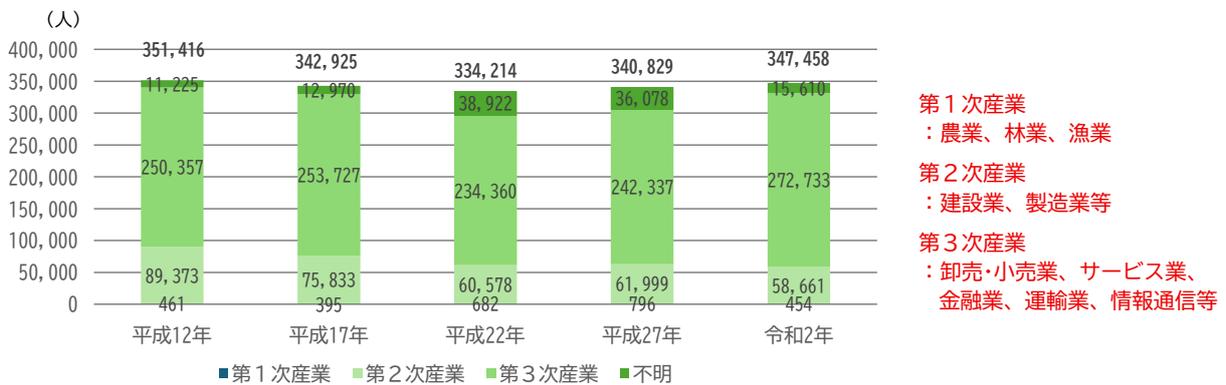


図1-2-7 産業別就業人口

①農業

区内には10数軒ほどの農家と約3.2ヘクタールの農用地がある。そこでは、ジャガイモ、ダイコン、ナス、シクラメン等が年間を通して生産されている。

なかでも、馬込大太三寸人参と馬込半白節成胡瓜は、大田区に伝統野菜として位置付けられている。

■馬込大太三寸人参

馬込大太三寸人参は、昭和25年(1950)に農林省に種苗登録された西洋ニンジンの改良種である。鮮やかな朱色で、長さは10センチメートル(3寸)程度、短い円錐の尻つまり形をしており、根の先が丸みを帯びているのが特徴で、芳香があり、柔らかく、甘い。



図1-2-8 馬込大太三寸人参

■馬込半白節成胡瓜

馬込半白節成胡瓜は、明治30年代(1895)から昭和30年(1955)ころまで栽培されていた。馬込で特産される、ヘタの部分が緑色で下が色白、茎の節ごとに実が成る「胡瓜」ということでこの名が付けられた。



図1-2-9 馬込半白節成胡瓜

②工業

要確認（最新データ確認）

令和3年(2021)経済センサス-活動調査報告(令和6年9月、大田区)によると、大田区には28,532の事業所が立地しており、そのなかでも製造業は3,584事業所が立地し、東京都内最大の集積となっている。

こうしたなか、従業員1～9人の事業所が全事業所の75%以上を占めており、区内事業所の多くが従業員の少ない小規模な事業所であることが分かる。なかでも、生産用機械器具製品、金属製品、汎用機械器具製品等の、機械金属加工のものづくり企業が多い。

③商業

令和3年(2021)経済センサス-活動調査報告によると、卸売業・小売業は、事業所数6,222店、従業者数79,735人、年間商品販売額2兆8,252億6,300万円となっている。これは、区内全産業に対して、事業所数が21.8%、従業者数が22.5%、年間商品販売額が27.2%を占めていることになる。

卸売業・小売業、宿泊業、飲食業、サービス業等が集積する商店街数の多さとともに、銭湯も東京23区最大級の件数を誇っており、大田区の特徴の一つである。

表 1-2-4 産業大分類別の事業者数、従業員数、売上(収入)金額(令和3年(2021))

	事業所数	構成比 (%)	従業者数 (人)	構成比 (%)	売上金額 (百万円)	構成比 (%)
	28,532	100.0	355,138	100.0	10,378,745	100.0
農林漁業	22	0.1	418	0.1	1,461	0.0
鉱業、採石業、砂利採取業	—	—	—	—	—	—
建設業	2,160	7.6	18,384	5.2	488,122	4.7
製造業	3,584	12.6	33,659	9.5	4,423,676	42.6
電気、ガス、熱供給、水道業	21	0.1	321	0.1	4,747	0.0
情報通信業	548	1.9	15,049	4.2	290,528	2.8
運輸業、郵便業	1,296	4.5	68,625	19.3	586,138	5.6
卸売業、小売業	6,222	21.8	79,735	22.5	2,825,263	27.2
金融業、保険業	339	1.2	5,537	1.6	189,611	1.8
不動産業、物品賃貸業	3,100	10.9	11,180	3.1	207,260	2.0
学術研究、専門・技術サービス業	1,287	4.5	8,727	2.5	100,854	1.0
宿泊業、飲食サービス業	3,223	11.3	23,755	6.7	205,227	2.0
生活関連サービス業、娯楽業	1,859	6.5	10,757	3.0	184,069	1.8
教育、学習支援業	701	2.5	7,192	2.0	141,768	1.4
医療、福祉	2,491	8.7	38,256	10.8	279,376	2.7
複合サービス業	81	0.3	1,224	0.3	4,395	0.0
サービス業(他に分類されないもの)	1,598	5.6	32,319	9.1	446,250	4.3

※売上金額は、必要な事項の数値が得られた事業者のみを対象に集計した値であるため、表中の事業所数(従業員数)の売上金額の合計を示しているわけではない。

※構成比の合計は、各項目の四捨五入の関係で合わない。

表 1-2-5 従業者規模別の事業所数と従業者数（令和3年(2021)）

		事業所数	構成比(%)	従業者数(人)	構成比(%)
		28,532	100.0	355,138	100.0
従業者規模	1～4人	16,370	57.4	34,745	9.8
	5～9人	5,347	18.7	35,126	9.9
	10～19人	3,463	12.1	46,895	13.2
	20～29人	1,370	4.8	32,584	9.2
	30～49人	887	3.1	33,361	9.4
	50～99人	538	1.9	36,839	10.4
	100～199人	230	0.8	31,708	8.9
	200～299人	75	0.3	18,223	5.1
	300～499人	51	0.2	19,192	5.4
	500人以上	46	0.2	66,465	18.7
	出向・派遣従業員のみ	155	0.5	0	—

※構成比の合計は、各項目の四捨五入の関係で合わない。

表 1-2-6 東京都内 23 区と大田区の銭湯数（令和6年(2024)12月末時点）

		銭湯の数（件）	23区に占める割合（%）
東京都		430	—
	23区	393	—
	大田区	33	8.4
	市部	37	—

(6) 観光

「東京都観光入込客数実態調査」によれば、平成26年(2014)～令和5年(2023)の、10年間の大田区の観光入込客数は、平成26年(2014)の17,706,405人をピークに減少し、令和元年(2019)には13,974,912人となった。

令和2年(2020)に発生した新型コロナウイルス感染症によって急激に減少した観光入込客数は、令和4年(2022)以降、徐々に回復しているが、令和5年(2023)時点で9,502,565人であり、令和元年(2019)の数値まで回復していない。

こうしたなか、羽田空港と成田空港の国際線ターミナル搭乗待合ロビーで訪日外国人を対象に実施したアンケート調査の結果を「令和5年国・地域別外国人旅行者行動特性調査(令和5年(2023))」で見ると、東京を訪れた外国人の目的として最も多いのは「観光・レジャー」で85.1%、次いで「親族・知人訪問」が4.2%、「その他ビジネス」が3.1%である。

なお、「大田区商店街調査報告書(平成26年(2014))」には、大田区の主な観光資源として、以下のモノやコトがあげられている。

表 1-2-7 大田区の主な観光資源（「大田区商店街調査報告書(平成26年(2014))」より）

・ 黒湯温泉(銭湯)への入浴	・ 町工場の見学
・ 羽根つき餃子などの地元名物の体験	・ 池上本門寺などの神社・仏閣・旧跡めぐり
・ 日本の暮らしを感じる商店街でのお買い物	・ 大森 海苔ふるさと館での海苔付体験
・ 四季を感じる催し	・ 東京湾のクルーズ・屋形舟
・ 水辺体験	・ 花卉や果物を扱う卸売市場の見学(大田市場)
・ 着付け・茶道・習字等の日本文化体験	・ 野鳥公園でのバードウォッチング
・ 郷土博物館・龍子記念館などの所蔵品の鑑賞	

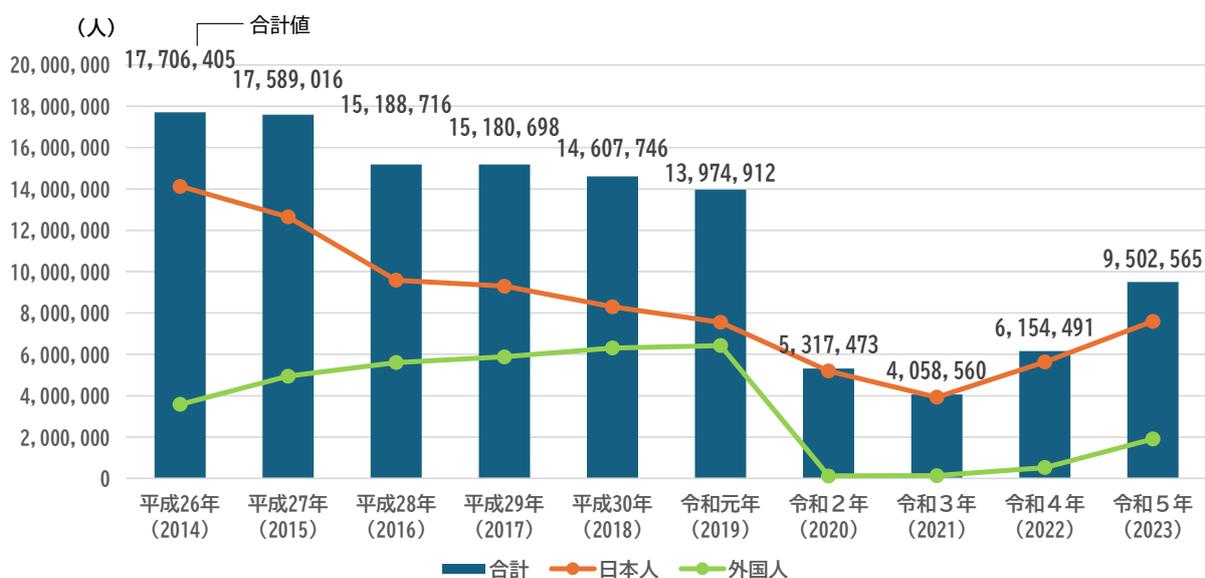


図 1-2-10 観光入込客数

1-3. 歴史的環境

要確認 (図(写真)掲載の可否)

(1) 歴史

大田区の歴史は、石器製作の際に生じた剥片の出土から、遅くとも後期旧石器時代(約3万年前～1万5000年前)には人々が生活していたとされることから始まる。

その後続く、大森貝塚をはじめ、竪穴住居や土器・石器等が多数発見されている縄文時代(約1万5000年前～3000年前)、久ヶ原遺跡をはじめ、台地部に集落が形成された弥生時代(約3000年前～3世紀前半)、多摩川左岸に大小多数の古墳群が築かれた古墳時代(3世紀後半～7世紀)、これらの遺跡から出土する様々な遺構や遺物等が、大田区における原始・古代の人々の、暮らしの場や形態等の変化を物語っている。

中世や近世においては、時の権力者等による土地や人の支配が起こっている。また、鎌倉時代に日蓮宗の開祖日蓮が池上の地で入滅したことが、その後の大田区の歴史的風致の形成にとって大きな影響を及ぼすこととなった。

近世後半から近代(明治期)、またそれ以降は、市場経済化が進み、海苔養殖や麦わら細工をはじめとする様々な産業が盛んにとともに、地域の発展と度重なる市町村合併による行政区域の変化の激しい時代を経ることとなった。

そして現代になると、京浜島、昭和島などの湾岸エリアの埋立てが進むなか、海苔養殖の終焉や公害・騒音などの高度経済成長に伴う問題が生じるようになった。

このように長い年月のなかで形成されて根付いてきた信仰や伝統行事、規則やルール等を含む地域文化は、今も地域やそこに暮らす人々に継承され、息づいている。

原始			古代			中世		近世		近代		現代						
旧石器時代	縄文時代	弥生時代	古墳時代	飛鳥時代	奈良時代	平安時代	鎌倉時代	南北朝時代	室町時代	戦国時代	安土桃山時代	江戸時代	明治期	大正期	昭和期・戦前	昭和期・戦後	平成期	令和期

図 1-3-1 時代区分

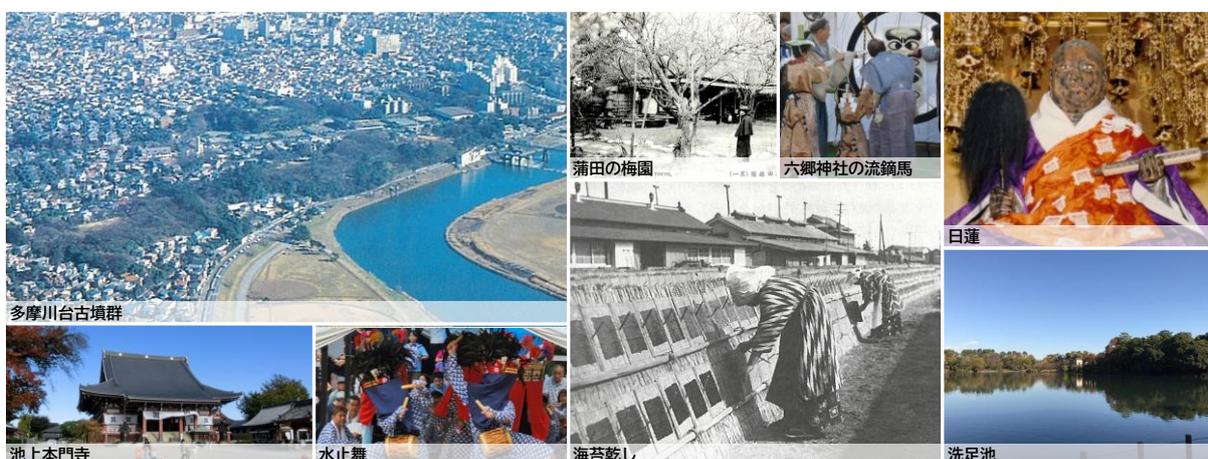


図 1-3-2 区内の主な歴史文化資源

①原始（旧石器時代、縄文時代、弥生時代）

ア.旧石器時代

旧石器時代(約3万年前～1万5000年前)の人々は、一ヶ所に定住せず、小さな集団で移動しながら狩猟採集生活を送っていた。大田区では、こうした旧石器時代の人々の生活の様子をいくつかの遺跡から見る事ができる。

代表的なものとして、昭和53年(1978)、武蔵野台地南端、多摩川と呑川に挟まれた久が原台地上に位置する久原小学校で、校舎と体育館の改築時に地面下約6メートルの地点から、炭化物片を多量に含む焼土や火熱による赤化と火割れの著しい礫群、また石器製作工程で生まれる剥片が多数出土した久原小学校内遺跡¹があげられる。調査の結果、約3万年前(後期旧石器時代に該当)の調理場や石器製作場等であるとされ、この頃よりこの地で人々が生活していたことが裏付けられた。しかし、この遺跡からは限られた範囲にわずかな遺物しか残っていなかったことから、小集団が短期間居住していたものと想像されている。



図1-3-3 久原小学校内遺跡

イ.縄文時代

気温上昇とともに海水面が上昇した縄文時代(約1万5000年前～3000年前)では、定住型の狩猟採集生活に代わっていった。特に、海の幸を享受できるようになったことが、区内で発見された雪ヶ谷貝塚、馬込貝塚、大森貝塚¹、下沼部貝塚等で分かる。

特に、東急池上線雪が谷大塚駅の北東約550メートルの呑川に面する雪ヶ谷貝塚は、広範囲に約6500年前～5000年前(縄文時代前期に該当)の竪穴式住居址31基をはじめ、土器や石器の生活道具等、多数の遺物が散布しており、大規模な集落であったことが想像されている。出土した貝の種類は、ハマグリ等の海で採取できるものが中心だった。

また、明治10年(1877)、アメリカ人動物学者エドワード・シルベスター・モースにより発見・発掘され、日本で最初の学術的発掘調査が行わ



図1-3-4 大森貝塚碑



図1-3-5 大森貝塚(出土品)

¹ 貝塚とは、縄文時代の人々が生活で使用した貝殻や動物の骨、土器等を捨てた場所である。かつては「貝墟」とも呼ばれていたため、石碑には「大森貝墟」と記されている。

れたことで有名な大森貝塚は、約 4000 年前～2300 年前(縄文時代後期～晩期に該当)の土器や土版、球状土製品、打製石斧、骨角器等が出土している。出土した貝の種類はテングニシ、バイ、サザエ、カキ等が多く含まれていた。その後の調査からは住居跡、装身具、魚や動物の骨等が大量に見つかっている。なお、本遺跡は品川区にまたがる国指定の史跡である。

ウ. 弥生時代

弥生時代後期(約 2000 年前)の区内では、田畑の跡は発見されていないが、稲粍の痕のある土器や炭化米が出土している。特に、多摩川と呑川に挟まれた台地上に確認された久ヶ原遺跡では、台地下の沖積低地に水田を作り、農耕を中心とする生活が営まれていたことが想像されている。久ヶ原遺跡は、複数回の調査の結果、11 万平方メートルに及ぶ遺跡規模内に約 1,000 軒を超える竪穴式住居が存在するなど、南関東だけでなく日本を代表する弥生時代の遺跡として知られている。



図 1-3-6 久ヶ原遺跡

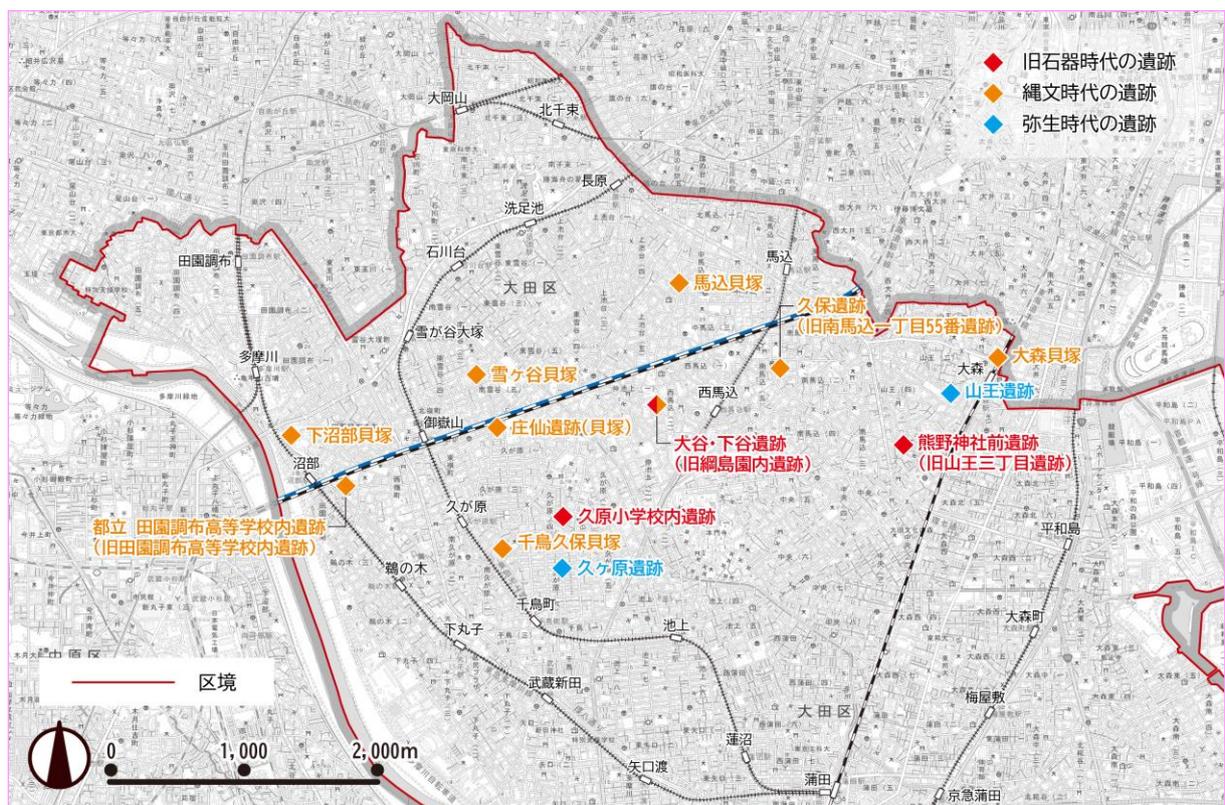


図 1-3-7 原始時代(旧石器時代、縄文時代、弥生時代)の遺跡分布

②古代（古墳時代、奈良時代・平安時代）

ア.古墳時代

大田区は古墳の密集地であり、その大部分は田園調布からのびる多摩丘陵地帯の、田園調布・鷓の木と連なる台地上にある。これらは土を盛った高塚式の古墳で田園調布古墳群(荏原台古墳群の内、田園調布を中心とする古墳群のこと)と呼ばれ、全長107.25メートル、前方部幅49.5メートル、同高さ約7.5メートル、後円部径66メートル、同高さ約10メートルの亀甲山古墳を筆頭に、4基の前方後円墳、47基の円墳よりなる大古墳群を形成している。なお、現在、塚としての痕跡がないものもある。

特に、亀甲山古墳は都内最大級の規模で、昭和4年(1929)に国の史跡に指定された。

近くには、宝萊山古墳や観音塚古墳等もあり、宝萊山古墳は、亀甲山古墳と並ぶ、多摩川流域最大の前方後円墳で、東京都指定の史跡である。

観音塚古墳からは文化14年(1817)に人物埴輪が出土し、現在は照善寺に保管されている。また、亀甲山古墳の南側にある多摩川浅間神社敷地内からは人頭と動物頭の埴輪や無数の破片が発見されており、ここも古墳であったことが知られている。なお、宝萊山古墳と亀甲山古墳に挟まれるように多摩川を望む台地縁辺に位置している墳墓を多摩川台古墳群と呼び、田園調布古墳群に属す群集墳である。



図1-3-8 亀甲山古墳(史跡)



図1-3-9 観音塚古墳からの出土品(人物埴輪)

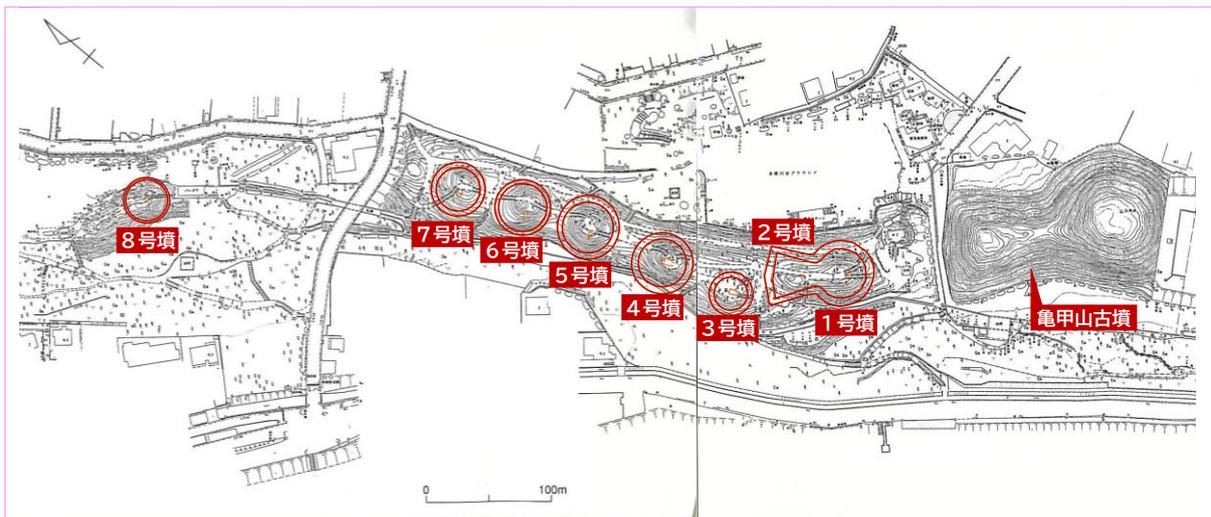


図1-3-10 多摩川台古墳群の分布

円墳では調布大塚小学校の裏にある**鶉木大塚古墳**が原形をよく保っており、規模も大きく、古くから「大塚」と呼ばれて付近の地名の由来にもなっている。また沼部駅に近い東光院裏手の台地上にも原形をよく残した円墳がある。

古墳時代終末期になると、台地の斜面に横穴を掘って遺体を葬ることが広く行なわれるようになる。当区は**500基以上の横穴古墳(横穴墓)**が密集群在する地域であり、上沼部群、下沼部群、鶉の木・光明寺群、久が原・根岸群、小池群、塚越群、本門寺・桐ヶ谷群、久保・平張群(馬込)、新井宿・山王群等は有名で、それらの場所からローム層のなかに掘られた横穴墓の大群が発見されている。

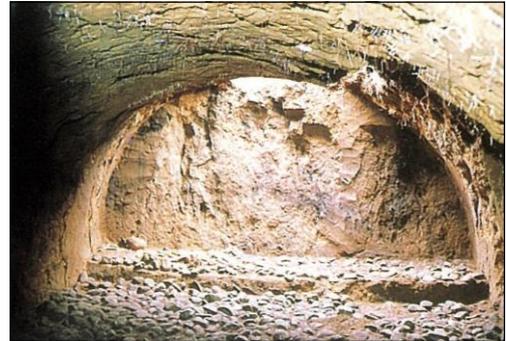


図1-3-11 横穴墓(山王遺跡群内横穴墓)

イ. 奈良時代・平安時代

奈良・平安時代は、日本列島に律令国家(律令制)が成立した時代である。律令制とは、**律令という法律に基づき**、全国の人民と土地を直接統治するための中央集権的な政治体制のことである。

大田区は武蔵国荏原郡にあたる地域に含まれ、『**和名類聚抄(和名抄)(天平年間(931-938))**』によれば、荏原郡には蒲田、田本、満田、荏原、覚志、御田、木田、桜田、駅家の9郷が存在していた。このうち、大田区に含まれるものを『**日本地理志料(明治35年(1902))**』に従うと、蒲田郷を中心に田本、満田、荏原、覚志、駅家の郷の一部であると推測されている。区内で当時代の遺跡は**27か所**が確認されており、低地部の貝塚や官衙関連遺跡、台地部の火葬墓群に大別される。特に、低地部の十二天遺跡からは、9世紀代の掘立柱建物や銅製丸靱、祭祀に使用されたと考えられる人型の木製品等が出土している。こうした特殊な遺物が多いことなどから、十二天遺跡は蒲田郷の官衙に関連する遺跡であると推定



図1-3-12 十二天遺跡から出土した丸靱

されている。当時代には、行基により開山あるいは創建されたと伝わる**安養寺**、**光明寺**、**蕨田神社**や**磐井神社**などがある。安養寺には、平安時代の作と伝わる**薬師如来**、**釈迦如来**、**阿弥陀如来**の3坐像(いずれも都指定の有形文化財)が安置されている。

承平5年(935)、藤原忠方が平将門の乱を平定した後、千束池(現：洗足池)に湖畔に居を構え、千束八幡神社(洗足八幡宮)を氏神として崇敬したと伝えられる。一説では、忠方は池の上手に居を構えたことから、後に池上姓を名乗ったと伝わる。

③中世（鎌倉時代、室町時代(南北朝時代)）

中世(鎌倉・室町時代)は、朝廷から任じられた国府の長官(国司)が公領を支配する体制と、皇族や貴族、大社寺が各地に荘園を展開するなかで、武士が台頭して公権力の一角を担い、領域を拡大させていった時代である。

当時代、後の大田区の歴史文化等に多大な影響を及ぼした出来事がある。日蓮宗の開祖である日蓮が、弘安5年(1282)10月13日、武蔵国荏原郡千束郷池上村の地頭である池上宗仲の邸宅で入滅したことである。詳細な入滅の場所は、現在の池上大坊本行寺のご臨終の間とされる。

弘安5年(1282)9月8日、61歳になる日蓮は、それまでの9年間に過ごしてきた身延山に別れを告げて、病氣療養のため常陸へ湯治に向かう途中の9月18日、病状悪化のため池上の地に身を寄せたが療養の甲斐なく亡くなっている。その後、池上宗仲が10月13日に屋敷の一部を寄進したことから池上本門寺がはじまると伝わる。

池上本門寺は、江戸時代に徳川家をはじめとした大名や多くの町人から信仰を集め、現在も、境内に五重塔や宝塔(いずれも重要文化財)、経蔵、石段(いずれも区指定有形文化財)等の歴史的な建造物が残るだけでなく、御会式や千部会等の日蓮の供養に関係する、地域が一体となった催事が行われる寺院となっている。

室町時代の武将である新田義興が、正平13年/延文3年(1358)、矢口渡(現：多摩川大橋上流側付近)において、豪族の世良田氏らの謀略により討たれて非業の最期を遂げた。この悲劇は「矢口渡伝説」として後世に語り継がれ、義興は怨霊として人々に畏れられ、この悲劇は「矢口渡伝説」として後世に語り継がれた。地元では、その霊を鎮めるために新田神社が創建され、今日まで地域信仰を象徴する存在となっている。

さらに、この伝承は、江戸時代には文芸や歌舞伎などの演劇の題材としても広まった。



図 1-3-13 木造日蓮聖人坐像



図 1-3-14 池上本門寺宝塔



図 1-3-15 新田神社

④近世（安土桃山時代(戦国時代)、江戸時代）

戦国時代、大田区域は後北条氏の支配下であり、『小田原衆所領役帳』等には当地の所領支配や役負担の実態が記録されている。そこには農地の石高、年貢割当、兵糧米の供出義務などが明記され、荏原郡(現：大田区)の村々が軍役や物資供出を通じて戦国大名権力に編成されていた様相がうかがえる。在地武士として行方氏が知られ、羽田神社縁起に行方与次郎の名が伝わるほか、妙安寺の妙安尼供養塔、円頓寺の行方弾正直清供養塔は、地域支配に関与した一族が寺院を通じて死後に供養された事実を示す。



図 1-3-16 六郷用水跡

後北条氏滅亡後、徳川家康は荏原郡を江戸南郊の穀倉地帯と位置付け、その大半を幕府直轄領とした。新井宿村を知行させた木原吉次には江戸城修築を命じ、また治水技術に長けた小泉次太夫吉次を登用し、六郷・稲毛・川崎一带の新田開発のため六郷用水や二ヶ領用水を開削させた。さらに酒井左衛門尉忠次を普請奉行に任じて六郷橋を完成させた。こうした施策は江戸の食糧供給と交通基盤の整備に直結していた。



図 1-3-17 蒲田の梅園(歌川広重作)
「名所江戸百景(安政4年(1857))」

江戸時代では、江戸蒲田氏は蒲田村の名主層として年貢徴収や村政の調整を担い、村落統制の実際的な役割を果たした。木原氏は万福寺や善慶寺への寄進を行い、山王熊野神社の祭祀に関与した。堂宇修復や檀家組織の整備、祭礼運営を通じて地域住民の宗教生活を支え、共同労働や年中行事を円滑に進める役割を担った。

江戸時代には大森産の海苔が幕府御膳海苔に指定され、地域特産品として流通した。大森は東海道の品川宿と川崎宿の間に位置し、道中常備薬の和中散や土産物の大森麦わら細工を求める旅人もおり、商業が活況を呈した。さらに梅園を備えた休息所梅屋敷は行楽地として知られ、そこで採れた梅を加工した梅びしお(練り梅)も名物として人気を集めた。

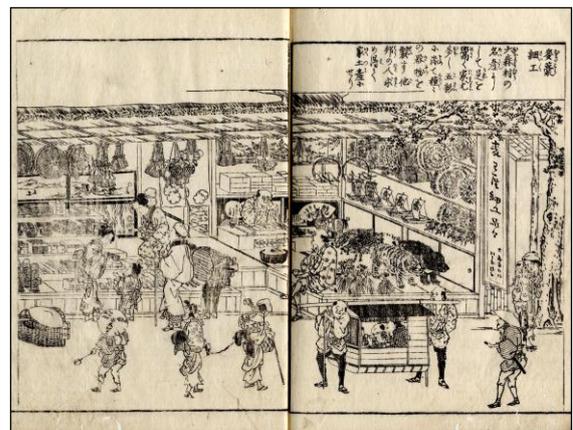


図 1-3-18 麦わら細工を売る店
「江戸名所図会(天保5年(1834)～7年(1836))」

江戸時代、日蓮宗の寺院や講中を中心に営まれた御会式の万灯練供養がある。秋の夜に無数の灯籠を掲げた行列が町を練り歩き、死者の冥福を祈る大規模な寺院行事である。また、双盤念仏も念仏講の活動として広まり、鉦や太鼓を打ち鳴らし、集団で唱和する儀礼が各地で行われた。さらに、富士山や武州御嶽山(現：武蔵御嶽山)への登拝を通じて信仰を深める富士講や御嶽講も広まりを見せた。



図1-3-19 万灯練供養

⑤近代(明治期、大正期、昭和期(戦前))

ア.大森区と蒲田区の誕生

慶応3年(1867)10月、江戸幕府第15代将軍・徳川慶喜が政権の返上を明治天皇に奏上し、これに対して天皇が勅許を与えたことにより、大政奉還が行われた。江戸幕府は、翌年の慶応4年(1868)4月に江戸城を明け渡し、260余年続いた幕藩体制は終わりを告げて、年号が「明治」と改められた。また、慶応4年(1868)7月、天皇は「江戸」を「東京」と改称する詔勅を出し、「東京府」が置かれることとなった。

明治元年(1868)、暫定的な武蔵県知事として、それまで関東代官であった山田政則、松村長為、桑山放が任命され、翌年(1869)、小菅県、品川県、大宮県の3県が置かれてそれぞれの県知事となっている。このとき、大田区は、品川県に含まれている。なお、当時の品川県の範囲は、現在の練馬・中野・杉並・新宿(一部)・渋谷・世田谷・目黒・大田・品川の9区、武蔵野・三鷹・保谷・府中・国分寺・川崎・横浜(一部)・所沢の8市などにあたる。

明治4年(1871)の廃藩置県後の大区小区制、明治11年(1878)の郡区町村制、さらには明治22年(1889)の市町村制により、大田区を含む東京地域の自治体編成が繰り返し行われた。その後は移管や合併が行われ、明治26年(1893)の東京府が概ね現在の東京都域となった。

昭和7年(1932)に編成・合併によりできた大東京35区の際に、現在の当区に該当する大森区と蒲田区ができている。なお、そのとき(昭和7年(1932)時点)の各区の人口は、大森区が169,068人、蒲田区が105,716人である。

イ.交通の発展

慶長6年(1601)、徳川家康は伝馬制を定め、江戸と京・大坂の交通を整備した。参勤交代が制度化されて東海道の往来がますます多くなると、宿場が栄えることとなり、大森付近は品川宿と川崎宿の間の宿として栄えている。

この「東海道」は、明治・大正期になると、さらなる交通量の増加に伴って、ほとんどが拡幅されているものの、大森本町2丁目から大森東1丁目にかけての「美原通り」等に往時の幅員が残され面影が残る。その他、江戸時代、相州(神奈川県)平塚の中原から江戸へ通じる近道として好まれた「中原街道」も現在は都道2号となり、区内では田園調布～千束(洗足池)を繋ぐ重要な路線の1つとなっている。

鉄道では、明治34年(1901)、京浜電鉄が六郷橋から大森停車場前間で営業を開始している。また、関東大震災で家を失った人々が郊外の閑静な地を求めて、大田区をはじめとする市街地周辺に移り住むようになり、それを後押ししたのが、大正末期から昭和初期に開通した池上電鉄や目黒蒲田電鉄等の鉄道である。なお、東急電鉄目蒲線²(目黒駅～蒲田駅)は、渋沢栄一らが開発を進めた田園調布の交通を確保するために整備したものである。

空港は、昭和6年(1931)、面積53ヘクタールに、延長300メートル、幅15メートルの滑走路1本を設けて開港した、我が国初の国営民間航空専用空港「東京飛行場」が羽田空港の始まりとなる。羽田空港は、昭和13年(1938)から昭和14年(1939)に飛行機の大型化に伴い、延長800メートル、幅80メートルの滑走路が2本整備されている。

なお、戦後は、占領軍に一時接収されるが、後に返還され、その後のさらなる航空需要に対応するため拡張工事が繰り返されて、平成22年(2010)に4本の滑走路を持つ現在の姿となっている。

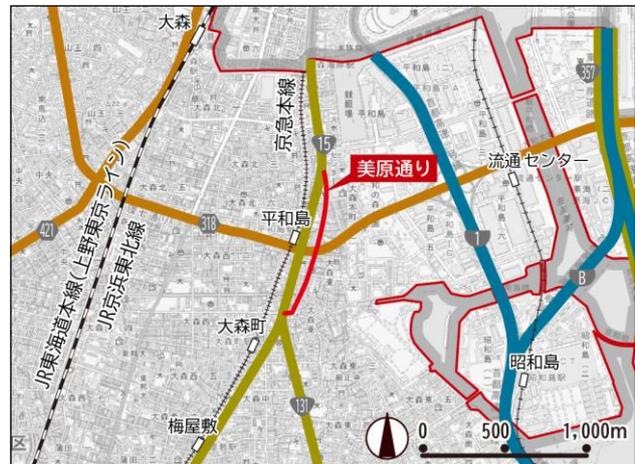


図1-3-20 美原通り(旧東海道:往時の幅員が残っている区間)



図1-3-21 田園調布を通る東急電鉄目蒲線(昭和7年(1932))



図1-3-22 羽田空港(当時は東京飛行場)(昭和6年(1931))

² 目蒲線は平成12年(2000)に多摩川駅を境に路線が分割(東急多摩川線、東急目黒線)され、目蒲線の名称は無くなっている。

ウ.近代工業の誕生

近代工業化は、明治41年(1908)、東京瓦斯株式会社の大森製造所の建設(大森町字東浜(現：大森東3-28))に始まり、本格化したのは、第1次世界大戦(大正3年(1914)～大正7年(1918))前後に起こった東京湾沿いの工場集積であると考えられている。

関東大震災(大正12年(1923))後は、工場進出の条件が整った多摩川沿いの耕地整理地区内にも都心から多くの工場が移転した。その後、昭和になると次第に戦争の色が濃くなり、戦時中は武器類をはじめとする軍需品が生産されたが、戦後は軍需産業から転換を図るため、日用品等が生産された。昭和25年(1950)の朝鮮戦争による特需も影響して、その後の地域経済は成長した。



図1-3-23 東京瓦斯電気大森工場(※要更新)

エ.住宅地田園調布の建設

大正4年(1915)、荏原郡の地主有志数名が、経済界の重鎮渋沢栄一を訪ね、荏原郡一帯の開発計画を説明して実施を依頼したことが田園調布建設のはじまりである。

渋沢栄一は、その後賛同者を得て、大正7年(1918)9月に田園都市株式会社を設立し、現在の洗足、大岡山、奥沢、田園調布の土地買収に乗り出して、大正10年(1921)11月には計画面積42万坪を上回る48万坪の買収を完了した。

関東大震災直後に開始された田園調布地区での土地分譲は、これと並行して進められた分譲後の住民の足を確保する鉄道敷設等により順調に進んだ。田園調布は、それより先に販売されていた洗足地区のような碁盤の目を基本とする従来の区画割ではなく、環状道路と放射道路が交差する「エトワール形式」と呼ばれる優美な街並みを形成した。



図1-3-24 田園調布駅前(昭和35年(1962))

田園調布地区は、その他の開発地と異なり、土地譲渡契約書には、①土地は住宅とこれに必要な附属の建物・庭園のみに用いること、②土地購入後1年6か月以内に住宅を建築すること、③許可なく1区画の土地を分割しないことなどが記され、さらに細かい規定として、㊶建物は3階以下とする、㊷建物敷地は宅地の5割以内とする、㊸住宅の工事費は坪当たり120円³以上とするなどの条件を付けられていた。



図1-3-25 田園調布の街並み(昭和36年(1961))

³ 大正12年(1926)の公務員初任給は75円であった。

これは、現在の建築協定にも匹敵する紳士協定としての建築規則であり、当時より「田園都市」としての環境や景観の維持が図られていた証である。

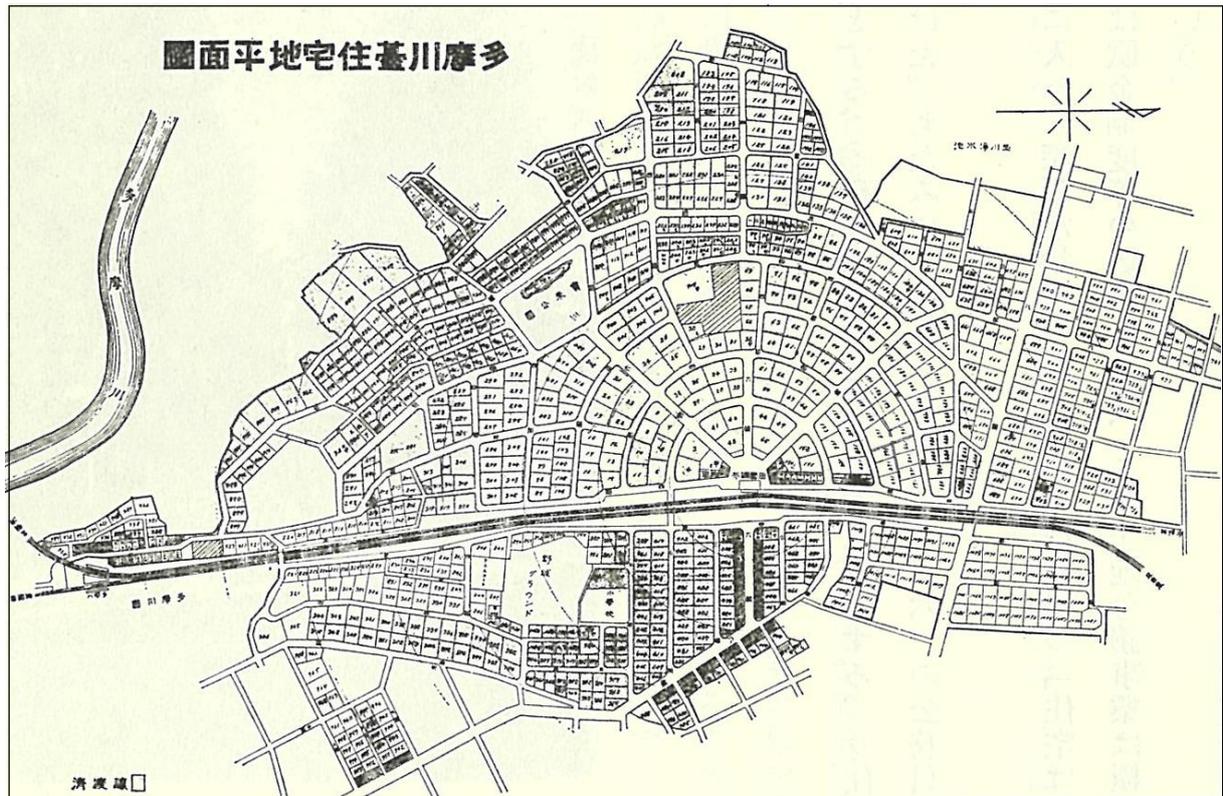


図 1-3-26 環状道路と放射道路が交差する「エトワール形式」と呼ばれる多摩川台住宅地(田園調布地区)の町割

オ. 馬込文士村の形成

大正 12 年(1923)の関東大震災を契機に昭和初期までの期間、大森駅周辺の山王から馬込にかけて開けた住宅地に多くの作家や芸術家たちが移り住んだ地が、いわゆる「馬込文士村」である。

文士村の中心人物と目されるのは『人生劇場』や『空想部落』で有名な尾崎士郎である。大正末期から昭和初期までの期間に、ノーベル文学賞受賞者の川端康成や、詩人・歌人の北原白秋をはじめとする 80 名余りの作家や芸術家たちが一時期馬込に暮らし、昭和文学発祥の地といわれるまでになった。



図 1-3-27 山王地区に残る尾崎士郎旧宅(記念館)

カ. 戦争(第2次世界大戦)による罹災

第2次世界大戦下において、当区(当時の大森区と蒲田区の2つ地区)に対する空襲は、昭和 19 年(1944)12 月 11 日に大森区入新井 1 丁目、山王 1 丁目が罹災したのにはじまり、主たるものだけで 13 回に及んでいる。そのなかでも、特に、昭和 20 年(1945)4 月 15 日の空襲は、B29 爆撃機 200 機の波状攻撃により区内最大の被害となり、死

者 629 人、負傷者 1,254 人、罹災住宅戸数 53,077 戸、罹災者 204,681 人を出した。

こうした度重なる空襲によりもたらされた大田区の被害総数は、『東京都戦争被害(昭和 23 年(1948) 7 月、東京都総務部調査課』によれば、大森区では、死者 283 人、重軽傷者 1,363 人、罹災者 104,518 人、同住宅戸数 26,883 戸、蒲田区では、死者 618 人、重軽傷者 666 人、罹災者 156,817 人、同住宅戸数 40,197 戸とされている。また、これらの罹災住宅戸数に基づいて、昭和 16 年(1941)の全戸数に対する割合をみると、大森区では約 41%、蒲田区では約 68%の住宅が焼失したことになる。



図 1-3-28 被災状況
(大森 6 丁目付近(昭和 20 年(1945)))

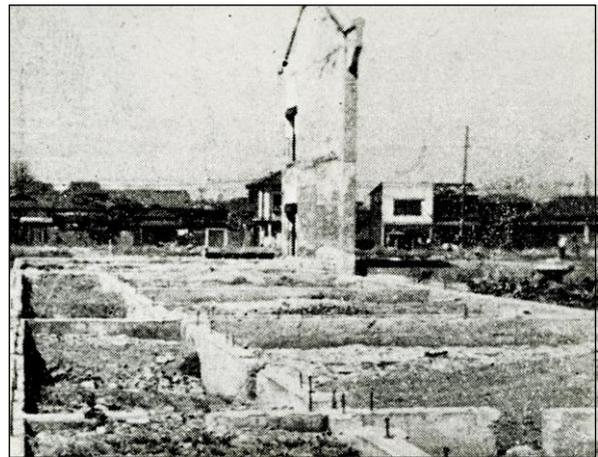


図 1-3-29 被災状況
(矢口東小学校(昭和 20 年(1945)))

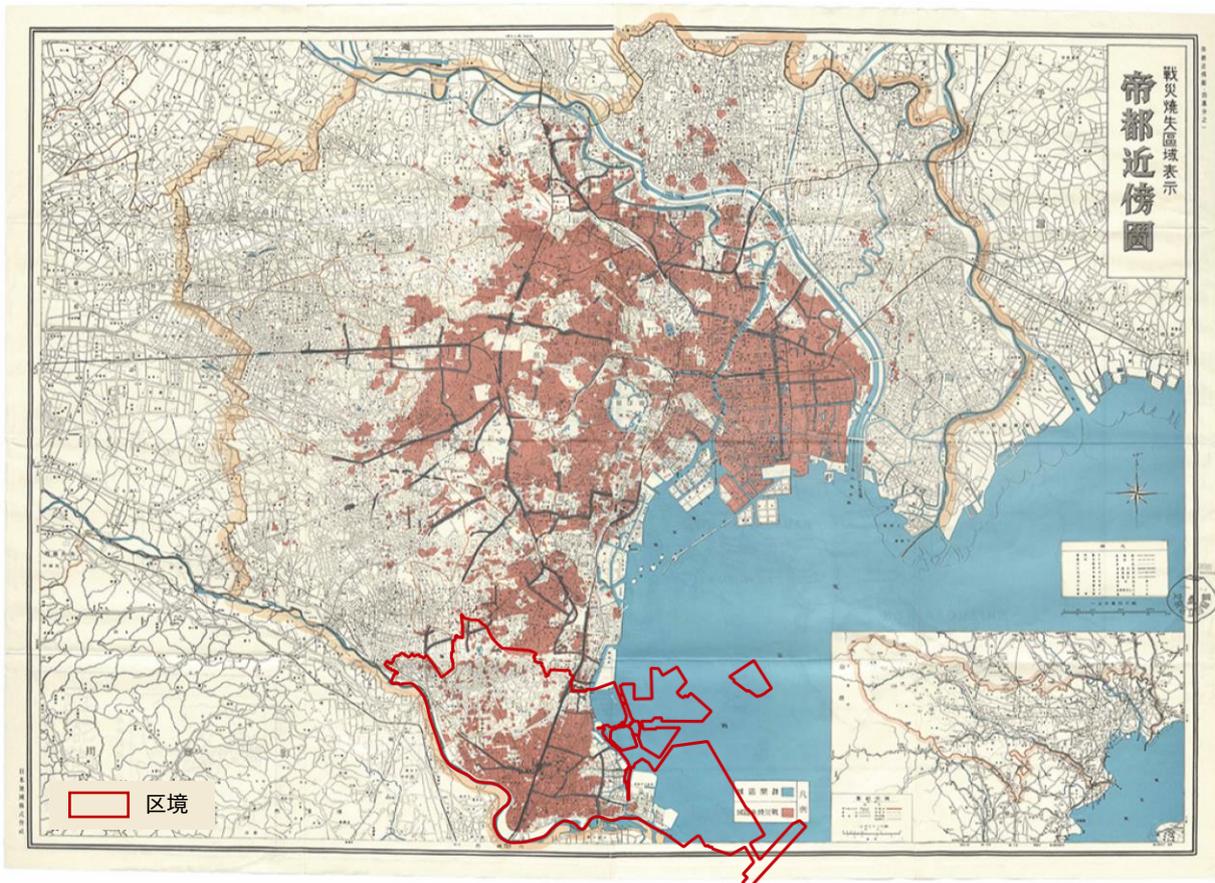


図 1-3-30 戦災焼失区域表示(帝都近傍図)(昭和 21 年(1946)) ※加工(現在の**大田区**の区域(赤線)を重ね合わせる)

⑥現代（昭和期(戦後)、平成期、令和期)

ア. 大田区の誕生

昭和 22 年(1947) 3 月、戦災による被害が大きかった東京は、それまでの東京 35 区を 22 区に統合整理した。このとき、大森区と蒲田区は合併して大田区となった。なお、同年(1947) 8 月に練馬区が板橋区から分離独立して 23 区になる。

昭和 22 年(1947) 5 月、日本国憲法の施行に伴って地方自治法が施行され、東京都の区は特別区となり、市町村と同様に地方公共団体(特別地方自治体)となった。

なお、「大田区」の名称は、それまでの「大森区」と「蒲田区」のそれぞれの名称から 1 字ずつ取ったものである。

イ. 戦災復興

東京都は昭和 21 年(1946)に「東京戦災復興都市計画」を決定したが、昭和 24 年(1949)のドッジライン(財政金融引き締め政策)によって、昭和 25 年(1950)に計画の縮小見直しが行われた。その結果、区内では、大森駅と蒲田駅を中心とした地域で昭和 30 年代～40 年代に戦災復興土地区画整理事業が実施され、現在の道路や街区の原型が整備された。

ウ. 羽田空港の開港

昭和 6 年(1931)に「東京飛行場」として開港し、戦後の昭和 20 年(1945)には連合国軍が接收していた羽田沖の空港は、昭和 27 年(1952)に、その大部分が返還されて「東京国際空港(通称:羽田空港)」に改称された。

昭和 53 年(1978)に成田空港が開港するのに伴って国際線が移転するも、旅客数の増大等により、昭和 59 年(1984)より沖合展開事業を開始

し、3 期の事業を経て現在の A・B・C 滑走路や第 1・2 旅客ターミナルが整備され、平成 13 年(2001)に国際チャーター機(深夜)の運航を開始した。また、羽田空港の再拡張事業では、新たに D 滑走路が整備され、平成 22 年(2010)には国際定期便の再就航を開始した。

令和元年(2019)には第 3 旅客ターミナルが供用開始され、現在は 4 本の滑走路と 3 箇所の旅客ターミナルを有する空港となっている。



図 1-3-31 羽田空港

エ. 海苔養殖(漁業)の終焉

大森から品川までの沿岸部では江戸時代中期に海苔養殖が行われるようになったと考えられており、その良質な海苔は、徳川将軍家や御三家等に献上されて、「御膳海苔」と呼ばれる最上品として位置付けられた。明治期から昭和初期には、大森・糎

谷・羽田地域を中心とした地域で盛んに行われ、日本一の海苔生産地となっていた。

江戸時代中期から大正期までの約 200 年間は、「木ヒビ」や「竹ヒビ」と呼ばれる海苔養殖資材が使われていたが、昭和初期に現在の海苔養殖で多く用いられる「海苔網」の原型が誕生した。昭和 20 年代に入り、海苔網の普及、終戦後の経済復興などにより、大森の海苔養殖は急速な技術成長を遂げた。

しかし、昭和 30 年代になると高度経済成長に伴う工場排水による海洋汚染や、昭和 39 年(1964)に開催される東京オリンピックを前に浮上した「東京港港湾整備計画」等により、昭和 37 年(1962)、東京都臨海部の漁業協同組合は漁業権を放棄することとなった。これにより、昭和 38 年(1963)春には東京都内湾での海苔養殖は終了し、現在、大田区内では海苔養殖は行われていない。

なお、大田区内には、海苔漁業を記念した碑が複数建立されており、貴船神社境内には大森漁業協同組合と海苔製造業による「海苔納畢の碑」、また大森児童館前には「漁業記念碑」等がある。



図 1-3-32 漁業記念碑(大森児童館前)

オ.環状 8 号線の開通、京浜急行本線の連続立体交差化

■環状 8 号線

環状 8 号線は、起点を大田区羽田空港 3 丁目とし、世田谷区、杉並区、練馬区、板橋区を経由して、終点を北区岩淵町とした、延長 44.22 キロメートル、車線数 4～6 車線、構造形式を地下式、掘割式、地表式の複数形態を有した環状(半円状)の都道(正式名:東京都道 311 号環状 8 号線)である。

環状 8 号線は、昭和 2 年(1927)に環状 7 号線とともに計画された道路であり、第 2 次世界大戦や戦後の財政難等により完成が遅れたが、昭和 35 年(1960)蒲田陸橋が完成、計画から 80 年経った平成 18 年(2006)に全線開通した。なお、環状 8 号線は通称道路名として「環八通り」と呼ばれている。



図 1-3-33 環状 8 号線(建設中の蒲田陸橋)

■京浜急行本線

京浜急行本線は、東京都港区の泉岳寺駅から神奈川県横須賀市の浦賀駅を結ぶ京浜急行電鉄の鉄道路線である。大田区内には、平和島駅、大森町駅、梅屋敷駅、京急蒲田駅、雑色駅、六郷土手駅の 6 駅がある。

京浜急行本線は、区内を南北に縦断するとともに、区の中心部にあたる京急蒲田駅付近で環状 8 号線と交差するなど、平面交差していた平成 10 年(1998)当時は「開か

ずの踏切」と呼ばれ、朝夕のラッシュ時には渋滞を引き起こしていた。

これを解消すべく、平成11年(1999)に平和島駅～六郷土手駅間の延長約5.4キロメートル(事業区間約4.7キロメートル)の連続立体交差事業が都市計画決定され、平成24年(2014)には上り線・下り線の全線高架化が完了した。これにより、環状8号線、第一京浜等との交差部における合計28箇所の踏切が解消され、これまでの渋滞がなくなるだけでなく、平均走行速度の2～3割も増加するなど、安全性・利便性の向上とともに地域活性化にも大きく貢献した。



図 1-3-34 京浜急行本線の連続立体高架化の高架前後(環状8号線との交差部)

カ. 令和島の編入

空港臨海部の中央防波堤埋立地のうち、中央防波堤より南側の敷地の西部に位置する部分が、令和元年(2019)10月に大田区への帰属が決定し、翌年令和2年(2020)6月に編入されて、面積1.03平方キロメートルの「令和島」が誕生した。なお、令和島は、海底トンネルにより、南西の城南島と結ばれている。



図 1-3-35 令和島

(2)大田区に関わりのある人物

要確認 (図(写真)掲載の可否)

大田区の歴史と関わりのある人物のうち、大田区の歴史的風致に関連する人物を取り上げ、その人物と関わりのある場所や施設を掲載する。※生没年には推定年を含む。

表 1-3-1 大田区の歴史的風致と関わりのある主な人物

肖像・関連施設	名前	概要
	ふじわらのただかた 藤原忠方 不詳～不詳 平安時代	平安時代前期の貴族。藤原北家、右大臣・藤原良相の子。 天慶3年(940)に発生した平将門の乱鎮圧後に武蔵国千束池に赴き、地名に因んで池上姓を名乗ったとされる説がある。
	みなもとのよしいえ 源義家 1039～1106 平安時代	平安時代中期から後期の武将。鎌倉幕府を開いた源頼朝や室町幕府を開いた足利尊氏の祖先に当たる。 11世紀前半の後三年の役(平安時代後期の陸奥・出羽を舞台とした戦役)で、奥州に向かう源義家が洗足池ほとりの千束八幡神社で戦勝祈願した。
	かじわらかげとき 梶原景時 1140～1200 平安時代～鎌倉時代	鎌倉幕府の初代将軍源頼朝に仕えた武将である。 南馬込の万福寺は、建久年間(1190-1199)、梶原景時が将軍源頼朝の命により、大檀那となり、梶原家相伝の阿弥陀如来三尊仏を本尊として、大井丸山というところに建立されたのが始まりと伝わる。
	ほうじょうまさこ 北条政子 1157～1225 平安時代～鎌倉時代	平安時代末期から鎌倉時代初期の政治家。鎌倉幕府初代将軍源頼朝の正妻である。多摩川浅間神社は、北条政子が信仰する富士浅間神社に対し、夫である源頼朝の武運長久を祈るため、持仏の観音像をこの地に祀って富士山に願ったのが始まりと伝わる。
	かじわらかげすえ 梶原景季 1162～1200 平安時代～鎌倉時代	梶原景時の嫡男。父とともに早くから源頼朝に仕え、養和元年(1181)には、その寝所の宿直を命じられるほどの信頼を得た。元暦元年(1184)宇治川の戦い(京都)には頼朝から与えられた名馬磨墨に乗り、池月に乗る佐々木高綱と先陣を争ったといわれる。
	いけがみのながし 池上某 不詳～不詳 鎌倉時代	池上宗仲の父。鎌倉幕府の作事奉行として、武蔵国池上の千束の郷を賜っている。官位は左衛門大夫。 真言律宗の忍性の熱心な信者であったため、日蓮の信徒となった宗仲を、建治2年(1276)、同3年(1277)の2度にわたり勘当している。

表 1-3-1 大田区の歴史的風致と関わりのある主な人物（続き）

肖像・関連施設	名前	概要
 ※夫妻坐像(右:池上宗仲)	いけがみむねなか 池上宗仲 不詳～不詳 鎌倉時代	日蓮の有力な檀越。官位は右衛門大夫。弘安5年(1282)9月18日、日蓮は、湯治のため常陸国へ旅する途中、武蔵国千束郷池上村の彼の邸宅に滞在し、同年10月13日に同邸宅で入滅した。日蓮入滅後、館や土地を寺に寄進し、池上本門寺の基礎となる。
	にっしょう 日昭 1221～1323 鎌倉時代	日蓮宗の僧。日蓮の本弟子で六老僧の一人。日蓮より1歳年長で、比叡山の学友であったが、建長5年(1253)に日蓮の門下になると伝わる。日朗の叔父にあたる。池上宗仲とは親戚関係にあると伝わる。日昭門流・浜門流の祖。
	にちれん 日蓮 1222～1282 鎌倉時代	日蓮宗の開祖。比叡山ほか各地で修行したのち、法華経に真の教義を見出した。建長5年(1253)、鎌倉で草庵を結んで布教活動を開始。2度の流罪の後、文永11年(1274)身延に籠り、久遠寺を開いた。病気のため湯治に向かう途中、武蔵国池上の地で入滅。
	にちろう 日朗 1245～1320 鎌倉時代	日蓮宗の僧。日蓮の本弟子で六老僧の一人。早くから日蓮のそばについて仕えた。弘安5年(1282)、池上宗仲の協力のもと、池上本門寺の基礎を築いた。鎌倉妙本寺、武蔵池上本門寺の主。日朗門流・池上門流・比企谷門流の祖。
	にっこう・にちこう 日興 1246～1333 鎌倉時代	日蓮宗の僧。日蓮の本弟子で六老僧の一人。弘安5年(1282)9月8日、常陸国への湯治を目指して身延を発った日蓮に随行。日蓮入滅後、富士上野に大石寺を開き、後に本陣を北山本門寺に移す。日蓮宗富士派・日興門流・興門派の祖。
	にちじ 日持 1250～不詳 鎌倉時代	日蓮宗の僧。日蓮の本弟子で六老僧の一人。初め駿河国蒲原の天台宗寺院四十九院で日興に師事し天台教学を学んだが、日興とともに追放され、日蓮に師事。日蓮入滅後は日興と不和となり、日浄とともに願主となって池上本門寺に祖師像を安置。
	にっしょう 日頂 1252～1317 鎌倉時代	日蓮宗の僧。日蓮の本弟子で六老僧の一人。日蓮の有力な檀越の富木常忍(日常)の養子となり、幼くして日蓮に師事。日蓮の佐渡配流の際も従って奉仕。永仁元年(1293)には常忍と対立し、故郷駿河国の日興のもとに赴き、重須本門寺の学頭となった。

表 1-3-1 大田区の歴史的風致と関わりのある主な人物（続き）

肖像・関連施設	名前	概要
	<p>にこう 日向 1253～1314 鎌倉時代</p>	<p>日蓮宗の僧。日蓮の本弟子で六老僧の一人。 13歳で入門し出家得度してから常にそばに仕える。 日蓮宗総本山身延山久遠寺第2世。千葉県茂原市の妙光寺(後の藻原寺)及び戸田市の妙顕寺を開く。 身延門流・日向門流・藻原門流の祖。</p>
	<p>かとうきよまさ 加藤清正 1562～1611 安土桃山時代～江戸時代</p>	<p>安土桃山～江戸時代初頭に活躍した武将である。日蓮宗の熱心な信者で、池上本門寺の寺域の整備と諸堂の建造に力を尽くした。「此経難持坂」と呼ばれる96段の石段は清正の寄進による。なお、本門寺境内の霊宝殿の裏に加藤清正供養塔が建っている。</p>
	<p>きはらよしひさ 木原義久 不詳～不詳 江戸時代</p>	<p>徳川家の木工頭であった木原家は、元来尾張にあったが、徳川家康の上洛と共に江戸に入った。大森山王高台を木原山と称して所領となし、居を構え、永く江戸幕府の大工頭を務めた。木原義久は、木原一族の一員である。</p>
	<p>のぐちろくろうざえもん 野口六郎左衛門 1592～1682 江戸時代</p>	<p>大森村堀之内(現在の大森中3丁目)の出身の野口六郎左衛門が、浅草の紙漉きの技術を応用して乾海苔(板海苔)をつくったと伝わる。 なお、浅草の紙漉きを真似たことから、「浅草海苔」と名が付けられたという説がある。</p>
	<p>かつかいしゅう 勝海舟 1823～1899 江戸時代～明治期</p>	<p>江戸幕府最後の総裁。徹底抗戦の主張に対し、早期停戦を主張して江戸無血開城を実現。新政府との最後の和平協議に向かう際に難を避けた洗足池付近の風景を気に入り、後年別荘「洗足軒」を池畔に設ける。</p>
	<p>さいごうたかもり 西郷隆盛 1828～1877 江戸時代～明治期</p>	<p>薩摩藩の下級武士の出。慶応4年(1868)勝海舟と池上本門寺で会談し、「江戸無血開城」を実現した。洗足池畔の「西郷南洲留魂詩碑」は、勝海舟が西南戦争で死亡し、朝敵とされた西郷隆盛の名誉回復の願いを込め、木下川浄光寺(葛飾区)に建立したものの。</p>
	<p>たかはししょうてい 高橋松亭 1871～1945 明治期～昭和期</p>	<p>9歳頃より伯父で日本画家の松本楓湖に日本画を学ぶ。宮内省外事課に勤め、勲章や宮中の器物等の図案製作に携わり、後は尋常小学校の教科書や新聞の挿絵等を製作した。その後は浮世絵の複製版画の制作、新作版画の制作に精力的に携わった。</p>

表 1-3-1 大田区の歴史的風致と関わりのある主な人物（続き）

肖像・関連施設	名前	概要
	かわせはすい 川瀬巴水 1883～1957 明治期～昭和期	版画絵師である巴水は、約 40 年におよぶ画業人生のうち 27 年間程を大田区内で過ごした。なかでも、昭和 5 年(1930)に移り住んだ馬込町での生活は、経済的に豊かではなかったが、一番面白い時代だったという。生涯で約 600 点をこえる作品を残した。

1-4. 文化財等の分布状況

区内には、旧石器、縄文、弥生、古墳時代を通じて形作られた特徴的な遺跡が多数残り、当時の生活の様子をうかがい知ることができる。大田区では、そうした遺跡や出土品をはじめ、建造物、民俗文化財などを数多く指定している。

令和7年(2025)現在で、区内に所在する国の指定文化財は、重要文化財4件、重要無形文化財2件、重要有形民俗文化財1件、史跡2件の計9件である。また、国の登録有形文化財(建造物)は31件所在している。

東京都の指定文化財は、有形文化財16件、無形民俗文化財3件、史跡4件、旧跡4件、名勝1件、天然記念物1件の計29件所在している。

大田区の指定文化財は、有形文化財82件、有形民俗文化財14件、無形民俗文化財2件、史跡18件、天然記念物2件の計118件所在している。

表 1-4-1 大田区における指定文化財などの件数 (R6.11.19時点) (件)

種類	国		都	区	
	指定	登録	指定	指定	
有形文化財	建造物	2	31	1	9
	絵画			1	4
	彫刻	1		4	29
	工芸品				3
	書跡・典籍			1	2
	古文書	1		9	7
	金石文※1	—	—	—	27
	考古資料				
	歴史資料				1
無形文化財	芸能	1			
	工芸技術	1			
民俗文化財	有形の民俗文化財	1			14
	無形の民俗文化財			3	2
記念物	遺跡※2	2		4	18
	旧跡※3	—	—	4	—
	名勝地※4			1	
	動物・植物・地質鉱物※5			1	2
合計		9	31	29	118

※1：「金石文」は、大田区独自の分類。

※2：「遺跡」は、国、東京都、大田区のいずれもが、それぞれの文化財を「史跡」と表現している。

※3：「旧跡」は、東京都独自の分類。

※4：「名勝地」は、国、東京都、大田区のいずれもが、それぞれの文化財を「名勝」と表現している。

※5：「動物・植物・地質鉱物」は、国、東京都、大田区のいずれもが、それぞれの文化財を「天然記念物」と表現している。

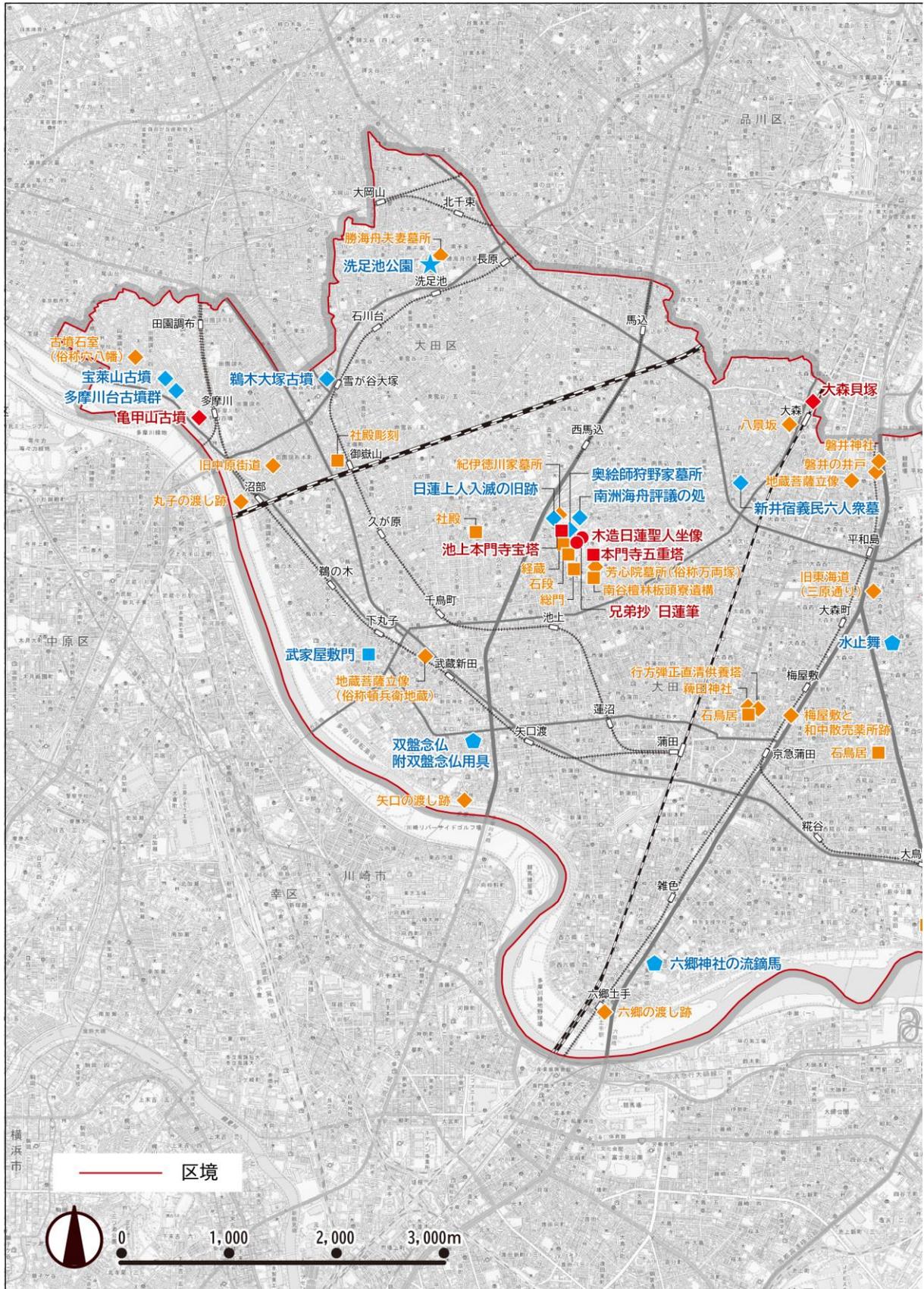
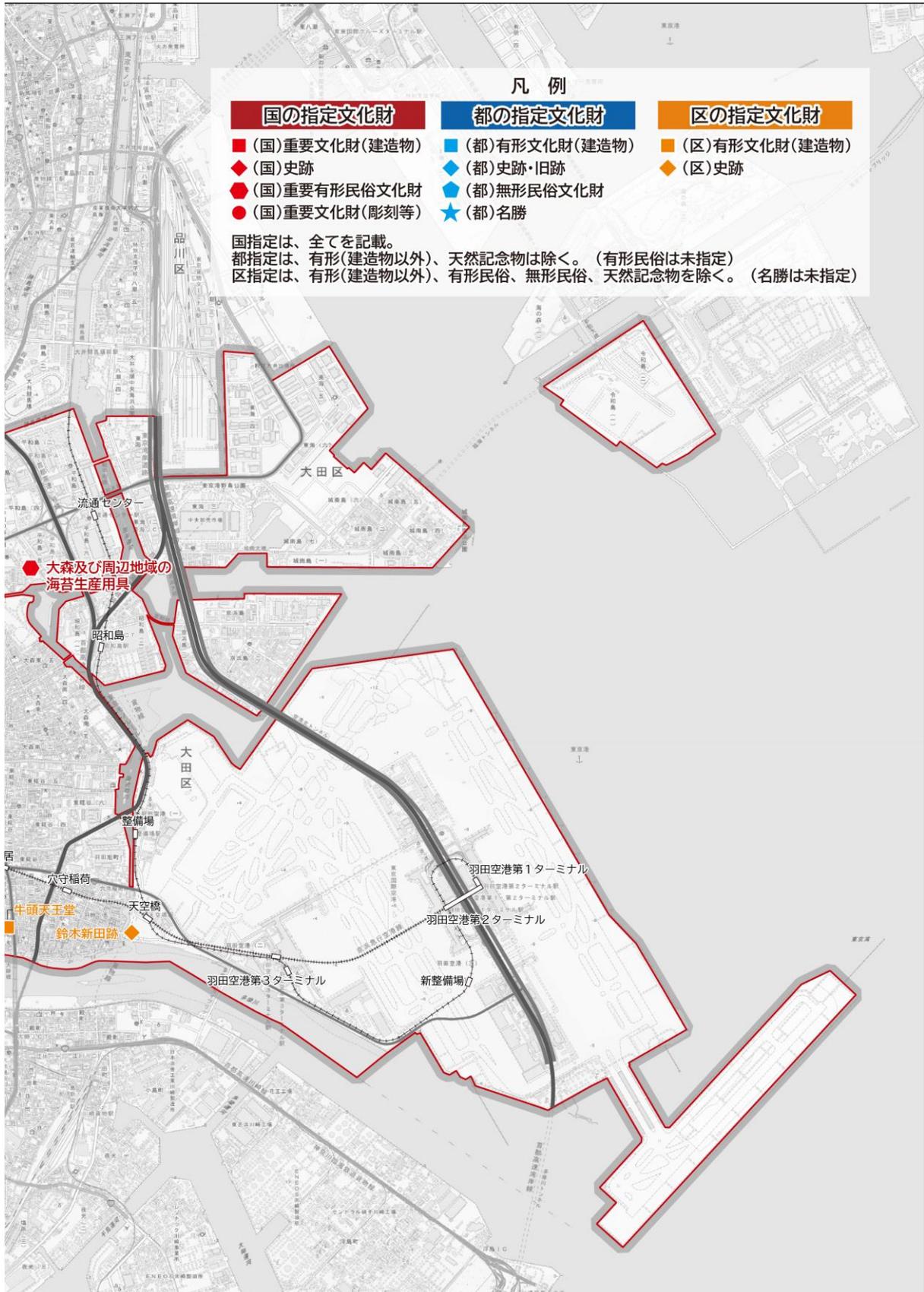


図 1-4-1 指定文化財の分布 (国、東京都、大田区が指定する建造物、有形民俗文化財、無形民俗文化財、史跡、名勝等を掲載)



(1)国指定等文化財

要確認 (図(写真)掲載の可否)

国の指定等文化財は、重要文化財4件(うち建造物2件、彫刻1件、古文書1件)、重要無形文化財2件、重要有形民俗文化財1件、史跡2件の合計9件及び登録有形文化財31件が所在する。これらのうち、主な文化財を以下に示す。

①重要文化財

ア.本門寺五重塔 (建築年：慶長13年(1608))

本門寺五重塔は、三間五重塔婆、初層・2層は本瓦葺、3層・4層・5層は瓦棒銅板葺(当初本瓦葺)、高さ31メートルの建物である。

2代将軍徳川秀忠公の武運長久・病氣平癒を当山に祈願した秀忠公の乳母岡部局が願主となり、秀忠公が建立・寄進した建物。当初、大堂の右手前(南東方向)、現在の鐘楼堂と対の位置に建てられたが、元禄15年(1701)から翌年の大修理の際に現在地へ移築された。



図1-4-2 本門寺五重塔

イ.池上本門寺宝塔 (建築年：文政11年(1828))

宝塔は、上下層とも円形の平面をもつ木造の仏塔で、屋根は宝形造、銅板葺、その上に露盤と相輪を載せる。

宗祖の550回遠忌に際し、信徒の本願により日蓮の遺体を茶毘に付したとされる地に、文政11年(1828)に上棟した。内外とも彫刻や彩色によって荘厳化が図られ、意匠的に高い価値が認められる。内部空間を持つ木造の宝塔は全国的にも類例が少なく、池上本門寺宝塔はそのうち最大規模の遺構である。



図1-4-3 池上本門寺宝塔

②重要有形民俗文化財

ア.大森及び周辺地域の海苔生産用具

東京湾臨海部の大森・糺谷・羽田地区で使用されてきた海苔養殖及び乾海苔製造用具一式である。

海苔生産の技術は、海上でのヒビや海苔網を用いた養殖技術と、採取した海苔を陸上で乾海苔にする製造加工技術の2つに大別される。平成5年指定の資料は、養殖用具、採取用具、加工用具、海苔船および船用具、海苔ヒビ等製作用具、漁場慣行用具、仕事着、飲食・



図1-4-4 大森及び周辺地域の海苔生産用具

灯火用具、その他に分類される。

③史跡

ア.大森貝塚（形成年代：縄文時代後期～晩期(約4000年～2300年前)）

JR京浜東北線大森駅より大井町駅に至る線路に面する地点にあり、縄文時代の後期から晩期に属する貝塚で、土器・石器・土版・骨角器等が多量に出土している。明治10年(1877)、アメリカ人動物学者エドワード・シルベスター・モースが来朝の際、車窓より発見し、同年10月わが国における最初の学術的な発掘を行い、同12年英文及び邦文によって発表された。



図1-4-5 大森貝塚碑

イ.亀甲山古墳（築造年代：古墳時代前期(4世紀後半)）

多摩川左岸の台地上に立地する多摩川流域最大の前方後円墳。全長約107メートル、後円部径約66メートル・高さ約11メートル、前方部幅約49メートル・高さ約7メートル、2段築成で葺石・埴輪は確認されていない。内部構造は未調査のため不明。



図1-4-6 亀甲山古墳

④登録有形文化財

ア.萬屋酒店（建築年：明治8年(1875)）

池上本門寺参道沿いの現在地に茶屋を営んだのが萬屋酒店のはじまりと伝えられている。厨子2階建、出桁造の江戸時代以来の町家の形式で、上げ下げ戸を含めて古い形態を残す。門前町の代表的な建物のひとつであり、ランドマークとなっている。



図1-4-7 萬屋酒店

イ.旧清明文庫（建築年：昭和3年(1928)）

大正期から昭和初期にかけて、勝海舟の墓所や別荘の保存、幕末維新时期の図書の収集・閲覧、講義の開催等を目的に、財団法人清明会が設立したものである。

外観は装飾的要素を控えた簡潔なデザインのなか、正面中央の玄関上から立ち上がるネオゴシックスタイルの柱型4本が特徴的である。内部はアールデコ調の彫物や要所に施されたモザイクタイルが目目を引く。鉄筋コンクリート造、3階建である。



図1-4-8 旧清明文庫

(2)東京都指定文化財

東京都の指定文化財は、有形文化財 16 件(建造物 1 件、絵画 1 件、彫刻 4 件、書跡・典籍 1 件、古文書 9 件)、無形民俗文化財 3 件、史跡 4 件、旧跡 4 件、名勝 1 件、天然記念物 1 件の合計 29 件が所在する。これらのうち、主な文化財を以下に示す。

①有形文化財

ア. 武家屋敷門 (建築年代：江戸時代末期(19 世紀中頃))

構造は一重、入母屋造、浅瓦葺、片番所出格子付、片潜門。桁行 14.4 メートル、梁間 5.4 メートル。

小大名格の武家屋敷門としては格調正しい様式を備えており、構造・形式ともによく保存されている。江戸時代末期の建築と推定され、現在地に移築されてからは、寺の山門として使用されている。



図 1-4-9 武家屋敷門

イ. 紙本着色新田大明神縁起絵 加卜筆

江戸時代、徳川将軍家が新田氏の末裔とされたことから、新田神社は武運長久の神として多くの武家から信仰を集めた。そうしたなか、延宝 4 年(1676)、松平政種から寄進されたのが、「新田大明神縁起絵」である。上下巻で構成されるやまと絵の絵巻物で、新田義興の生涯から新田神社の創建までが緻密に描かれている。詞書の筆者は上野佐兵衛、絵師は上野加卜と記されている。



図 1-4-10 紙本着色新田大明神縁起絵 加卜筆 (下巻より抜粋)

ウ. 仏像群 (安養寺)

安養寺には、都指定の有形文化財(彫刻)である、薬師如来、釈迦如来、阿弥陀如来の 3 坐像を除き、木造弘法大師坐像をはじめとする 35 体の仏像が、本堂と薬師堂に安置されている。

種類は、如来、菩薩、天部など多種にわたり、そのほとんどが、像底刻銘により、元禄 12 年(1699)、当寺中興 6 世栄弁の代に造立されたことが分かる。



図 1-4-11 仏像群(十王坐像)

②無形民俗文化財

ア.水止舞

約700年の歴史を持つ雨を止める祈りの民俗芸能。厳正寺で開催される。まずは雨乞いの儀式として、わらで編んだ縄を巻きあげて作った2匹の龍神に水をかけながら進む「道行」が行われる。龍神が喜ぶことを表現するため、藁の中にはほら貝を吹く大貝役が入る。厳正寺境内の舞台に到着すると、今度は、赤面の雄獅子と黒面の若獅子と金面の雌獅子の3匹の獅子が、奉納笛や唄に合わせて舞を披露することで龍神を鎮めて雨を止める。



図1-4-12 水止舞

イ.六郷神社の流鏝馬

六郷神社の流鏝馬は、一般的な馬を駆けながら行うものではなく、的の手前まで歩いてから弓を射る「歩射(「オビシャ」とも)」と呼ばれる形式の正月行事。

6尺(約1.8メートル)四方の垂れ幕の中心に、内・上・外・下を見つめる4対の鬼の目玉「八方白眼」が貼られ、ここに矢を放つことで、その年の恵方を寿ぐとともに邪気退散の願いを込める。



図1-4-13 六郷神社の流鏝馬

③史跡

ア.多摩川台古墳群 (築造年代：古墳時代後期(6世紀前半～7世紀中頃))

多摩川下流域左岸の台地上に分布する古墳時代後期の古墳群。6世紀前半に円墳の2号墳、その後2号墳を前方部に利用した1号墳(全長39メートルの前方後円墳)、以降3～8号墳(直径15メートル前後の円墳)が7世紀中頃まで継続して築造された。調査が行われた古墳の石室からは装身具や武器・武具、馬具、土師器、須恵器などが出土、墳丘からは埴輪が発見されている。



図1-4-14 多摩川台古墳群

④旧跡

ア. 日蓮上人入滅の旧跡

日蓮は晩年身延山に隠棲し、弟子や信者の指導に当たっていたが、弘安5年(1282)9月8日、病氣療養のため身延山を離れ、武蔵国荏原郡千束郷池上村の地頭、池上宗仲の邸宅(現：本行寺)に到着し、10月13日にこの場所に入滅したと伝えられている。



図 1-4-15 日蓮上人入滅の旧跡(現：本行寺)

⑤名勝

ア. 洗足池公園

武蔵野台地の湧き水を集めた洗足池を中心とした公園。洗足池は、かつて「千束郷の大池」と呼ばれ、灌漑用水としても利用されていた。日蓮が病氣療養のため身延山から常陸国に向かう途中に立ち寄った際、池で足を洗ったことが「洗足池」の名の由来といわれている。広さ約 39,000 平方メートルの洗足池を中心に、桜を代表とする四季折々の自然をはじめ、史跡、社寺等の歴史的資源が豊かな、開園面積約 78,000 平方メートルの総合公園である。



図 1-4-16 洗足池公園

(3)大田区指定文化財

大田区の指定文化財は、有形文化財 82 件(建造物 9 件、絵画 4 件、彫刻 29 件、工芸品 3 件、書跡・典籍 2 件、古文書 7 件、金石文 27 件、歴史資料 1 件)、有形民俗文化財 14 件、無形民俗文化財 2 件、史跡 18 件、天然記念物 2 件の合計 118 件が所在する。これらのうち、主な文化財を以下に示す。

①有形文化財

ア. 総門 (建築年代：元禄年間(1688-1704))

高さ 6.4 メートル、主柱間 5.39 メートル、**総檜素木造**の壮大な構えの池上本門寺総門。元禄年間(1688-1704)に建てられた。広重の浮世絵(**名所江戸百景**)などにも描かれている。

扁額の文字は、本阿弥光悦の書を彫刻したものである。額は複製され、実物は寺宝として**本門寺霊宝殿**に保管されている。



図 1-4-17 総門

イ. 牛頭天王堂 (建築年：文久元年(1861))

自性院(本覚寺)にある牛頭天王堂は、**入母屋造**、銅板葺。向拝に軒唐破風を付け、その下に弁財天の彫刻が施され、各軒廻りに斗拱を持つ。**棟札から、近在の稲葉信重・重吉親子により手掛けられたことが判明している**。区内では数少ない、江戸末期の精巧な社殿彫刻を有する。昭和 4 年(1929)に大森弁天社より移築されたものである。

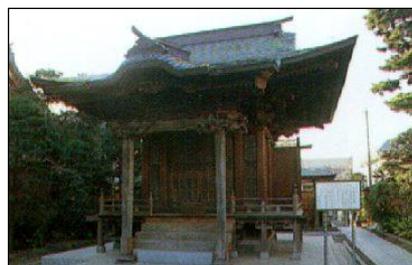


図 1-4-18 牛頭天王堂

②有形民俗文化財

ア. 庚申供養塔 (造立年：寛文元年(1661))

田園調布南の密蔵院にある庚申供養塔は、寛文元年(1661)に造立された大田区最古のもの。舟型の石に地藏菩薩立像を半肉彫りした、江戸初期の典型的な様式を示している。

当時の沼部村村民の有志 8 名が造立したものである。「**沼部の庚申様**」と呼ばれている。



図 1-4-19 庚申供養塔(田園調布南の密蔵院)

③無形民俗文化財

ア.六郷神社獅子舞

六郷神社の例大祭で行われる獅子舞は、200年以上の歴史を有する。第2次世界大戦前後に一時休止したが、昭和23年(1948)に再開した。獅子の威勢が悪疫、災禍を払い、平安と幸福をもたらす信仰に支えられてきた民俗芸能である。六郷神社の獅子舞は、昔から神事舞(祭り儀式の一種として行なわれる舞)としての伝統を守っているため、演舞は祭りの日に限られている。なお、獅子舞は子どもたちによって行われている。



図1-4-20 六郷神社の獅子舞

④史跡

ア.勝海舟夫妻墓所

勝海舟は、新政府軍の本陣が置かれた池上本門寺に赴く途中、洗足池で難を避け、周辺の風景が気に入った。明治24年(1891)、その縁で、海舟は洗足池のほとりに別荘「洗足軒」を構えた。その後、死去した海舟は遺言により洗足池畔に葬られた。

明治38年(1905)に死去した妻である民子は青山墓地に葬られたが、戦後、海舟の隣に合葬された。



図1-4-21 勝海舟夫妻墓所



本門寺の扁額

池上本門寺の総門に掛けられている扁額は、熱心な法華経信奉者であった本阿弥光悦の書を彫刻したものである。「本門寺」の3文字を大書し、その左下に「鷹峯山」「大虚菴光悦」の刻銘がある。

額裏には、当時復歴16世日樹の書で由緒が刻まれており、本阿弥一族が父母供養のため、寛永4年(1627)に寄進したことが分かる。

戦前は山門と祖師堂にも同筆の額が掛けられていたが、戦災により焼失し、現在は総門に掛けられている当額だけが残った。

大田区内における光悦の書としては、唯一、由来と記年が明確なものであり、名筆家たる彼の堂々たる書風を示す貴重な作品として保存・展示されている。檜材、幅2.43メートル。

現在、総門に掛けられている額は化学分析により色彩再現した複製である。



図1-4-22 本阿弥光悦書「本門寺」扁額

(4)主な未指定文化財

国、東京都、大田区指定等の文化財以外に、大田区内に存在する歴史的価値の高い文化財を「未指定文化財」として紹介する。

①未指定の史跡

ア.新田神社

新田義興は、正平13年(1358)10月10日、畠山国清等の奸計により、矢口の渡において憤死した。このことがあってから、矢口村に夜々「光り物」が現れ、往来の人を悩ませたため、墳墓を築き、社祠を興して新田大明神として奉斎したのがはじまりとされている。



図1-4-23 新田神社

イ.六郷用水跡

六郷用水は、多摩川を水源として狛江市から世田谷区を通り、大田区に至る、延長約23キロメートルの水路である。慶長2年(1597)から14年をかけて整備されたもので、主に農業用水として利用された。

昭和20年(1945)、周辺の宅地化等を理由に用水は廃止され、埋立てや雨水用下水となったが、現在、一部区間を散策路として整備したり、水路を復元したりして、地域の歴史や魅力を感じることができる場となっている。



図1-4-24 六郷用水跡

ウ.光明寺

舌状台地の先端部に立地しており、古来から眺望に優れた場所だったと考えられる。旧石器・縄文・弥生・古墳(横穴墓)・奈良・平安・中世・近世いずれの痕跡もある。

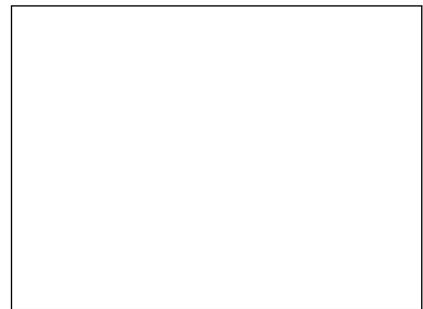


図1-4-25 光明寺

工. 萬福寺(無量院)

萬福寺は、源頼朝に仕えた武将・梶原景時が建立し、のちに南馬込に移されたと伝えられる寺院である。

「小田原衆所領役帳」に馬込の領主が梶原助五郎とあることから、鎌倉梶原氏と関連付けて伝承されたものと考えられる。

萬福寺境内の墓地には、梶原景時の墓(五輪塔)や、徳川幕府の棟梁であった木原義久の墓がある。



図 1-4-26 萬福寺(無量院)

オ. 田園調布

渋沢栄一の計画により、大正7年(1918)から建設された、日本で最初の住宅専用市街地である。

駅東側は主に商業地域、また西側は住宅地として分譲された。特に西側は駅を中心に放射状道路と同心円状道路が設けられ、街灯、街路樹、上下水道などが配置された。低い建ぺい率や、道路や隣家との間は生け垣を用いるなど、景観を保つための配慮が行われた。



図 1-4-27 田園調布の街並み

②遺跡・塚等

ア. 久ヶ原遺跡

多摩川と呑川に挟まれた、標高約 13~19メートルの広く平坦な舌状台地上に位置している。

遺跡規模は 11 万平方メートルで、累計 1,000 軒を超える弥生時代の竪穴式住居址が存在すると推定され、巨大な集落が長期的に形成されていたと考えられる。



図 1-4-28 久ヶ原遺跡

③古墳・横穴墓

ア. 鶉の木 1 丁目横穴墓群(鶉の木松山公園内)

鶉の木 1 丁目横穴墓群は、鶉の木松山公園の東斜面の標高約 12 メートルの地点に、7 世紀後半から 8 世紀前半にかけて構築されたものである。

鶉の木松山公園内には 7 つの横穴墓があり、なかには、大田区周辺に見られる特徴的なきりいしせんもんこうぞう切石羨門構造をもつ、貴重な横穴墓であることから、発掘当時の姿で保全されている。区内で唯一見学が可能である。



図 1-4-29 鶉の木 1 丁目横穴墓群

④公園・緑地

ア. 貴船堀緑地

計画面積約 1.13 ヘクタールの貴船堀公園(都市計画公園)の一部である。

かつて貴船堀という運河であった場所を埋め立ててつくられた公園(緑地)で、昔は海苔生産者が多くの船を浮かべていた地帯であった。

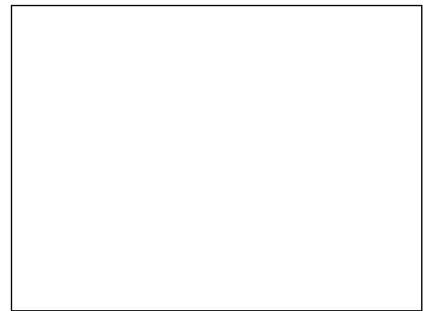


図 1-4-30 貴船堀緑地(貴船堀公園)

⑤墓・石碑・供養塔等

ア. 霊山橋・題目石塔

池上本門寺への参道途中の霊山橋たもとに立つ、日蓮宗の寺院で見られる「南無妙法蓮華経」の題目を刻んだ石塔である。

題目文字は本門寺 43 世日撰によるもので、文化 8 年(1811)に立てられている。

なお、この石塔は、浮世絵や絵画に多く登場し、門前のシンボルとなっている。



図 1-4-31 霊山橋・題目石塔

⑥その他土木構造物

ア. 鐵道院鉄柱

明治 45 年(1912)、当時の鐵道院の命によって鑄造された鉄柱である。

現在、大森駅の東口広場のテラス柱として保存されている。2 本あり、写真左側の鉄柱には「鐵道院」の銘が刻まれ、右側の鉄柱には「明治四十五年七月製造」と「合資会社高田商会 柳島製作所」が刻まれている。



図 1-4-32 鐵道院鉄柱

イ. レンガ造りの堤防(多摩川沿岸)

かつての多摩川は暴れ川と呼ばれ、大雨のたびに氾濫し、周辺に甚大な被害をもたらしていた。

大正 7 年(1918)から行われた河川改修工事は、昭和 8 年(1933)まで続き、そのときに建造されたレンガ造りの堤防が、役割を終えた今も約 1.6 キロメートルに渡って断続的に残っている。



図 1-4-33 レンガ造りの堤防

(5)特産品、工芸品、菓子・料理等

①特産品

区内には、農業、水産業に関わる特産品がある。代表的なものを以下に示す。

表 1-4-2 特産品

写真	名称	特徴
	まごめはんしろふしなりきゅうり 馬込半白節成胡瓜	明治 33 年(1900)頃、馬込村で白い部分の多い、独特の性質をもった馬込半白がつくられた。大正 9 年(1920)頃、篤農家数件でつくられ、その後、昭和 8 年(1933)には、『馬込半白採種組合』が設立されて品種の保存と均一化に努めた。盛んに栽培されたのは昭和 38 年(1963)頃までであるが、現在も馬込地区では数戸の農家が栽培している。
	まごめおおぶとさんすんにんじん 馬込大太三寸人参	西馬込の篤農家により、砂村三寸と川崎三寸を交配し、各々の長所を受け継いだ、大形で形・色のよい人参が改良され、固定された。昭和 25 年(1950)、大森東部農協が『馬込大太三寸人参』の名称で農林省に種苗登録して以後、馬込の特産品となった。盛んに栽培されたのは昭和 38 年(1963)頃までであるが、現在も馬込地区では数戸の農家が栽培している。
	馬込のシクラメン	戦後、大森東部農業協同組合(現：JA 東京中央馬込支店)の青年部有志が「馬込園芸研究会」を立ち上げ、昭和 27 年(1952)に試験的に作り始めたのが実質的な始まりである。現在でも 2 軒の生産農家があり、11 月から年末になると、温室は出荷・販売される色とりどりのシクラメンであふれかえる。
	大森海苔	海苔養殖は、享保(1716-1736)の頃、大森から品川の沿岸部で始まり、延享 3 年(1746)、將軍家に献上する海苔の産地としての発展が成長のきっかけである。その後、東京都の沿岸部埋立計画に応じ漁業権を放棄したことで、昭和 38 年(1963)に海苔養殖の歴史は幕を閉じた。しかし、現在も多く海苔関連業者が海苔の流通拠点として営業している。

②工芸品

区内の工芸品に関する代表的なものを以下に示す。

表 1-4-3 工芸品

写真	名称	特徴
	江戸表具	表具の歴史は奈良時代に始まるが、江戸表具は17世紀初頭、江戸に幕府が開かれたことにより、大名や社寺とともに抱えの表具師が江戸に居を構えたのが始まりである。江戸の武家文化から発展してきた江戸表具は、控えめで軽妙な意匠のなかにも豪華さや華やかさをあわせ持つのが特徴である。

③菓子・料理等

区内の菓子・調理などの代表的なものを以下に示す。

表 1-4-4 菓子・調理など

写真	名称	特徴
	くずもち 久寿餅	関東圏でみられる「久寿餅」は、小麦粉からグルテンを分離させた浮粉(でんぷん)を乳酸菌で発酵させて作るものであり、これは関西圏の葛粉を使って作る「葛餅」とは異なる。池上駅や池上本門寺門前等にある老舗では、通年で製造・販売している。
	羽根つき餃子	今では、全国の中華料理店や大手冷凍食品メーカーからも販売されている「羽根つき餃子」は、蒲田が発祥であるといわれている。蒲田にある中華料理店の創業者が、中国・大連の焼饅頭をヒントに作った羽根つき餃子が人気となり、現在、蒲田には羽根つき餃子を提供する店舗が多くみられるようになった。

1-5. その他の歴史文化資源

「1-4. 文化財等の分布状況」で示した「文化財」とは、歴史的・芸術的・学術的価値の高い有形・無形の文化的所産を指す広い概念として用いている表現である。

一方、「指定、登録または選定文化財」とは、上記の「文化財」のなかで、特に重要と認められ、文化財保護法または条例によって国や地方公共団体が指定、登録または選定した文化財のことを指す。

なお、「文化財」のなかで、上記の「指定、登録または選定文化財」以外の文化財は、「未指定文化財」と表現している。

大田区では、これらの「指定、登録または選定文化財」や「未指定文化財」の「文化財」には含まれない比較的最近の資源であっても、人々の営みなかで生まれ、育まれ、未来に残していきたいと願う地域固有の資源(モノ・コト)を含めた全てを、「歴史文化資源」として捉え、今後の歴史まちづくりを進める際の手がかりとする。

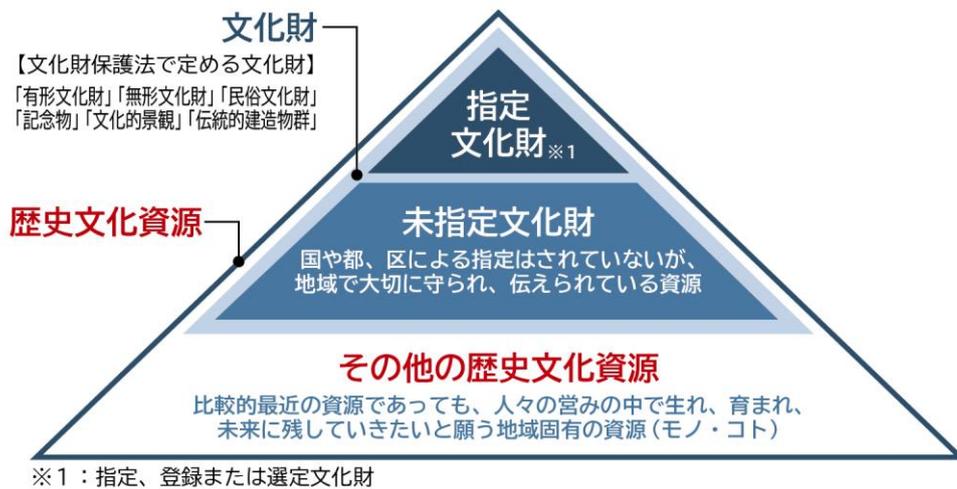


図 1-5-1 その他の歴史文化資源

「その他の歴史文化資源」は、次の分類で整理したものを巻末の「参考資料」に掲載する。なお、「その他の歴史文化資源」は、区民の推薦などにより、適宜見直しを行い、更新する。

表 1-5-1 歴史文化資源の分類

分類	内容